公開資料

# 企画調査終了報告書

## 研究開発プログラム「犯罪からの子どもの安全」

## プロジェクト企画調査名

「子ども中心の体験型安全教育プログラムの開発」

調査期間　平成１９年１０月～平成２０年３月

研究代表者氏名　清永賢二

所属、役職　　日本女子大学人間社会学部　教授

## １．企画調査課題

(1)研究代表者　　：清永賢二

(2)企画調査課題名　：子ども中心の体験型安全教育プログラムの開発

(3)企画調査期間　　：平成１９年１０月～平成２０年３月

## ２．企画調査構想

本企画調査においては、犯罪からの子どもの安全確保のため、子どもを中心に保護者や地域社会が体験による安全確保策を学ぶ「教育カリキュラムとモデル的体験施設」(以下、これらを「安全体験教育プログラム」とも呼ぶ)作りに必要とされる事前の基礎的な研究作業を行う。

具体的には、以下の７つの作業グループを編成し研究を進めた。

① 総合調整

（第１グループ　責任者　清永賢二　日本女子大学教授）

② 設置されるモデル的体験施設の形態やその内容に関する事前研究

（第２グループ　責任者　田中賢　日本福祉大学情報社会科学部准教授）

③ 施設でなされるモデル的教育カリキュラムの事前研究

（第３グループ　責任者　宮田美恵子　日本女子大学市民安全学研究センター研究員）

④ 体験教育カリキュラムの評価手法とその指標に関する事前研究

（第４グループ　責任者　米川英樹　大阪教育大学教授）

⑤ 施設・教育運営組織体制に関する事前研究

（第５グループ　責任者　篠原惇理　積水ハウス（株）設計本部次長）

⑥ 体験施設が設置される地域・場所の特性と特性に応じた施設の決定に関する事前研究

（第６グループ　責任者　小出治　東京大学工学部教授）

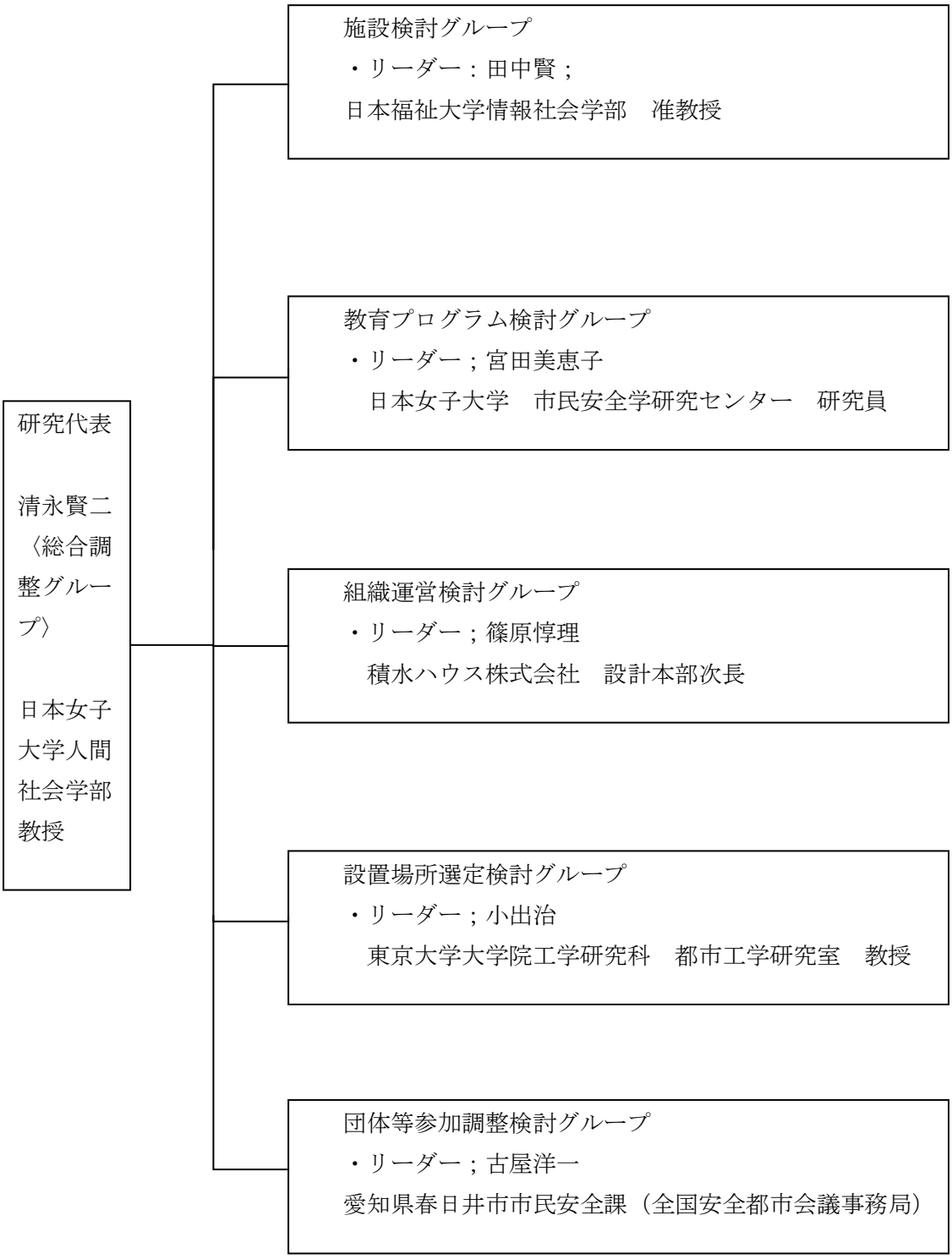
⑦ 子どもの安全に関わる自治体・行政機関との調整に関する事前研究。

（第７グループ　責任者　古屋陽一　春日井市市民安全課長）

⑧ これらのグループによる作業によって、犯罪者の基本行動とその行動阻止プログラム、体験教育施設の模型、子どもの安全教育プログラム及び子どもの施設体験教育の効果測定チェックリストの雛形等が研究開発された。

## ３．企画調査実施体制

### （１）体制



(2) メンバー表

①総合調整 グループ

| 氏名 | 所属 | 役職 | 研究項目 | 参加時期 |
|---|---|---|---|---|
| 清永賢二 | 日本女子大学人間社会学部 | 教授 | 研究全体の指導・調整。犯罪者の行動と犯罪発生場所に関する研究。英国の安全教育体験施設の研究。 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 宮地孝宣 | 日本女子大学人間社会学部 | 助教 | Ｅ－ラーニングによる安全教育の全国展開の可能性に関する研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 大谷　純 | 日本女子大学人間社会学部教育学科 | 助手 | 研究全体の調整補助作業 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 石火矢真名 | 日本女子大学人間社会学部教育学科 | 学部３年 | 研究全体の調整補助作業 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |

②施設検討グループ

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 田中　賢 | 日本福祉大学情報社会科学部 | 准教授 | 体験学習における子どもの行動分析。体験施設の設備内容の検討。英国の安全教育体験施設の研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 吉田　健 | 積水ハウス（株）ハートフル生活研究所 | 研究員 | 体験学習施設の基本模型の作成。 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 松野　愛 | 日本女子大学人間社会学部教育学科 | 学部４年 | 不審者の研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |

③施設でなされるモデル的教育カリキュラムの事前研究

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 宮田美恵子 | 日本女子大学市民安全学研究センター | 研究員 | 子どもの安全教育に関する基本カリキュラムの作成。英国の安全教育カリキュラムの研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 楊　奈穂 | 日本女子大学市民安全学研究センター | 研究員 | ビデオ教材の作成。体験に伴うトラウマの研究。英国の安全教育カリキュラムの研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 長谷川邦彦 | 日本女子大学人間社会学部 | 客員教授 | ビデオ教材の作成。体験に伴うトラウマの研究 | 平成２０年１０月～平成２ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | | １年３月 |
| 大河原達夫 | 栃木県益子町立益子西小学校 | 校長 | 子どもの安全教育の基本カリキュラムの作成 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 岩田廣史 | 長崎県警察本部 | 警察職員 | 近隣住民の子どもの安全に関する教育カリキュラムの基本項目の検討 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 小島直子 | 東京都私立大和郷幼稚園 | 教諭 | 幼稚園児の安全教育基本カリキュラムの作成 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 中川さおり | お茶の水大学大学院人間文化研究科 | 博士課程後期３年 | 小学校児童の安全教育基本カリキュラムの作成 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 尾崎万帆子 | 慶應義塾大学大学院法学専攻 | 博士課程後期２年 | 中学生の安全教育基本カリキュラムの作成 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 藤原由紀 | 日本女子大学人間社会学部教育学科 | 学部３年生 | 地震等体験に伴うトラウマの発生に関する研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |

④体験教育カリキュラムの評価手法とその指標に関する事前研究

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 米川英樹 | 大阪教育大学教育学部学校教育講座 | 教授 | 子どもの安全教育体験の効果測定チェックリストの研究。 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 小山高正 | 日本女子大学人間社会学部心理学科 | 教授 | 子どもの安全教育体験の効果測定チェックリストの研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 館瑞恵 | 日本女子大学大学院人間社会研究科 | 博士課程後期２年 | 子どもの安全教育体験の効果測定チェックリストの研究。英国の安全体験教育の研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |

⑤組織運営体制検討グループ

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 篠原惇理 | 積水ハウス（株）設計本部 | 次長 | 体験施設の組織・人員や予算の研究。施設検討の研究。英国の安全教育体験施設の研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 川嶋宏昌 | （株）ステップ総合研究所 | 主任研究員 | 体験施設の組織・人員や予算の研究。英国の安全教育体験施設の研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 辻春雄 | 長崎県県民生活部 | 県民生活安全課長 | 体験施設の組織・人員や予算の研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |

⑥体験施設が設置される地域・場所の特性と特性に応じた施設の決定に関する事前研究

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 小出治 | 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 | 教授 | 社会経済指標による地域類型化と類型に応じた体験施設の配置に関する研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 矢作由美子 | 常磐大学被害者学研究科 | 研究員 | 体験施設設置モデル地域の策定分析 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 柳生雪衣 | 日本女子大学大学院人間社会研究科 | 博士課程前期１年 | 体験施設設置モデル地域の策定分析 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |

⑦団体等参加調整検討グループ

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 古屋陽一 | 愛知県春日井市市民安全課 | 課長 | 市レベルの地方自治体の参加方式の策定に関する研究。英国の安全教育体験施設の研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |
| 加藤貴幸 | 静岡県県民生活室 | 専門監 | 県レベルの地方自治体の参加方式の策定に関する研究。英国の安全教育体験施設の研究 | 平成２０年１０月～平成２１年３月 |

４．実施内容及び成果

（１）第１グループ・・・・・６～２０頁
（２）第２グループ・・・・・・・２１～４９頁
（３）第３グループ・・・・・・・５０～５８頁
（４）第４グループ・・・・・・・５９～６２頁
（５）第５グループ・・・・・・・６３～６９頁
（６）第６グループ・・・・・・・７０～７１頁
（７）第７グループ・・・・・・・７２頁
（８）成果の発表等・・・・・・・７３頁

≪総合調整グループ≫

（第１グループ　責任者　清永賢二　日本女子大学教授）

１．企画調査の全体調整

各グループで行われている調査の進捗状況について２週間に１回の研究会を開催した。その都度、必要とされる支援（他団体や自治体等との調整）を行った。

２．犯罪者の行動と犯罪発生場所の特性、及び犯罪防止手法の研究

犯罪からの安全教育を子どもに行うためには、基礎的研究として、犯罪者の行動と犯罪実行環境（犯罪発生場所）の特性が明らかにされる必要がある。

そのため、元常習的犯罪者（侵入盗。男性。６４歳）を対象とするヒヤリング調査を2008年2月に実施した（写真１－１）。主な結果として、以下の事が判明した。

・罪種や手口の違いに関わらず、犯罪は「共通の原理」によって理解することが出きる。

即ち、犯罪は、「加害者（犯罪者）」「被害者（標的）」「（この両者をつなぐ）相互行動過程」の三要素から成立する。

・従って、侵入盗犯であれ、子どもを狙った性犯罪者であれ、この図式には違いがない。

犯罪者は、この図式をいかに自分に都合良く（合理的に)成立させるかを目標として行動する。

・犯罪者の行動と心理は、被害者（標的）との空間距離によって変化する（写真１－２）。

被害者に最も近づいた２０ｍの距離では、犯罪者は「良い獲物」「見咎められない」「やりやすい」という条件によって実行するか否かが決定される。特に、「やりやすい」が最終的な行動決定条件となる。

・「やりやすい」は、さらに「近づきやすい」「逃げやすい」に分解される。

・「近づきやすい」は、具体的に、以下のようなポイントで示される。

- （被害者との間に）障害物がない
- （周囲や被害者から）見えにくい
- （加害者が）隠れやすい
- （通学路のように被害者の動線が定まっていて）待ち伏せすることが出来る
- （高い塀などが連続し）被害者の危機回避行動がむつかしい

・「逃げやすい」は、具体的に、以下のようなポイントで示される。

・（交番や住民自主パトロールのない）逮捕・通報の危険性がない
・（周辺からの）視線がない・視線が遠い
・（どの方向へも逃走できる）大小の道が交差している
・（樹木が生い茂り、潜伏しやすく、追いかける人の）視線を切りやすい
・（公園や学校など、公共空間など、特に夜間）人気が無くなり、追いかけられない
・（街路や家屋に十分な明かりが無く）姿や形が確認できない

写真１－１　犯罪者のヒヤリング状況

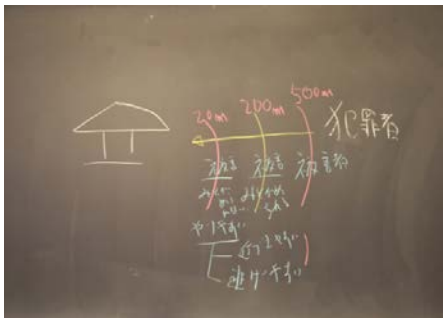



写真１－２　犯罪者心理の空間的変化

３．犯罪発生危険空間の策定

・上記のような「近づきやすい」「逃げやすい」ポイントに対する元犯罪者からのヒヤリング結果を基に、「犯罪の発生しやすい危険な空間」とその空間が「なぜ危ないのか」の検討が、犯罪学・建築学・都市工学・犯罪心理学等の学問分野の研究者の共同討議でなされた。

・さらに、この空間について、元犯罪者へのヒヤリング結果及び清永が先行的に検討していた「各種犯罪者の犯罪行動に関する研究　1992年実施」の結果と比較しつつ、最終的に１２の「犯罪発生危険空間」を策定した（図1－１）。

・この「犯罪発生危険空間」を今後の体験施設作りの中心概念とする。

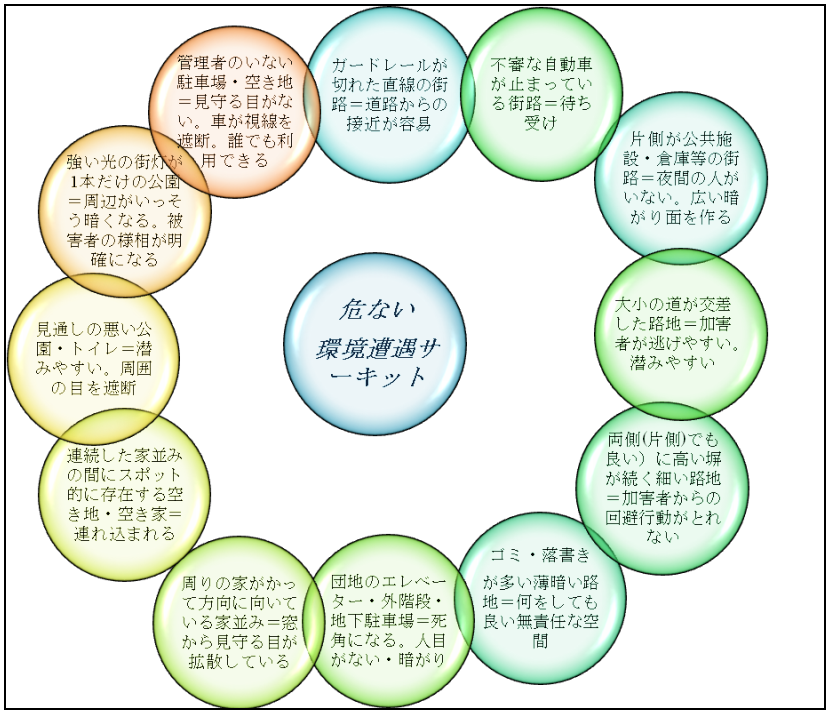



図 1－1　犯罪者の判定を基にした犯罪発生危険空間

4．英国―子どもの安全教育体験施設の実査（子どもの安全教育カリキュラム調査）

英国での安全教育（ＰＳＨＥＥ）の一環として、実際に体験教育を実施しているミルトンキーンズ、ボーンマス、ボドミンの３箇所において実査を行った（地図１－１）。

**地図１　　視察地点**

## （1）　ミルトンキーンズ Safety　Center

実査期間；２００８年１月

担当者　；清永賢二、楊　奈穂、川嶋宏昌

### ①施設概要

ア　設立：１９９４年

イ　建物：企業提供の倉庫

ウ　人的構成：スタッフ８名および７０人のボランティア

エ　周辺環境：倉庫、畑の中にある。

オ　アクセス：

Miltonkeynes Stationからタクシーで５分(２００７年時点で約£８)

カ　トレーニング開始時間：午前１０：００～／午後２：００～

＊基本的に一日２セッション。要望に応じて夜間も実施。

＊土日祝日は休み。

キ　年間利用者数：20,000人

ク　入場料：£7.5

ケ　講習の所要時間：約２．５時間

### ②Safety　Centerの特色

ア　施設内容

一般住宅（子ども部屋、リビング、キッチン）、公衆電話、工事現場、道路列車、ガソリンスタンド、暗い道、恐怖体験ビデオ、池、農場、コンビニエンスストア

イ　体験教育方法

ア）１日２セッションおこなう。１セッションにつき最大収容人数７２人の生徒。

イ）セッション約２．５時間の授業。

ウ）６人グループに別れ、１グループにつき１人ガイドがつく。

エ）子どもが体験している間は、引率の教師は控え室にいるか、離れてみている。

オ）緊急電話をかける場面など、子供の様子をDVDに録画する。

ウ　対象

主に７歳以上１２歳までの児童を対象とする。

その他、救命活動講習等大人向の講習も別途行っている。

エ　利用状況

学校からのツアーのみ受け付け。1セッションにつき最大７２名まで受け入れ可能。教育委員会を通して見学者を募集する。

オ　設置目的

子どもが天災や犯罪の危険な場面を実際に体験し、安全教育を学ぶ。

カ　特徴

主に子どもの社会見学に特化している。

キ　オープンデー

一年に一回オープンデーを設け、大人も子供も一緒に体験することができる。普段子供から施設の面白さを聞き、自分たちも体験してみたいと思っている家族が多い。

**③具体的内容**

セッションの体系は、以下のようである。

ア　１シーン約１０分、１０シーンを回る。

イ　事前及び事後指導を各１０分ずつ行う。

ウ　１グループ６人の児童に対し、１人のボランティアがつき説明。

**④機能**

ア　ボランティアに関して

ボランティア養成に関しては、半年間の座学・体験トレーニングを行う。70人の登録者が、日替わりで参加。

イ　体験学習後の学校での復習方法

教師に復習用ＣＤ－ＲＯＭを配布、復習をしてもらう。内容は、クイズ形式になっており、○×を付ける質問が多い。また、センターにおいて実際に子どもたちが緊急電話をかけている様子を録画、そのＤＶＤも配布し、それを見ながら良い点、悪い点を復習し、しっかりと緊急電話をかける練習をする。また、児童に、印象に残ったシーンの絵を描いてもらい、センターに送ってもらう。

ウ　リニューアル

施設の内容に関しては常時更新している。警察や消防署、地方行政や弁護士などの意見を取り入れながら、更新していく。

**⑤運営に際しての問題点**

ア　運営資金の確保

安全教育は必須カリキュラムとして、国のカリキュラムに組み込まれているにもかかわらず、国からの援助はほとんどなく、企業や個人からの寄付や、地方自治体からの援助で賄っているのが現状である。

写真　１－1　　センター内部の通路

写真１－ 2　電話ボックス

（2）ボーンマス　STREETWISE　SAFETY　CENTER

実査期間；２００８年１月

担当者　；加藤　貴幸、古屋　陽一、舘　瑞恵

①施設概要：

ア　設立　　：１９９８年

イ　始動　　：１９９９年１月

ウ　開館時間：０８:００～１７：００

（Training；　１０：００－　／　１２：３０－１５：００）

※基本的に土日祝日は休み。

エ　敷地面積：９００㎡(２６～６０台を収容出来る駐車場併設分を含む)

オ　建物　　：自動車整備場を改築したもの。

建設費用　£１，０００，０００＝£５００，０００(実費)＋£５００，０００
（２億５千万円　1£２５０円換算）　（スポンサーからの寄付と物品提供）

※大学が学生の実地教育として建設に協力したため、本来の所要金額の半分で済んだ。

カ　維持管理費　£２５０，０００(サラリー・電気・ガス・上下水道)

→スポンサーなどからの支援で工面する（毎年更新制）。

キ　周辺環境：工場地帯　←あまりよい環境とはいえない。アクセスも正直あまりよくない。

ク　登録：独立チャリティ団体

ケ　協賛：ローカルカウンシル、消防、警察、保健局

コ　運営：

ア）センターマネージャー

イ）センタープロモーター：スポンサー対応

ウ）ツアーコーディネーター：ボランティア養成

エ）サイトスーパーバイザー

オ）アドミニストレーター

カ）経理担当 ＋α〔ボランティアグループ（１０～１２人）〕

⑪入場料：子ども£３、大人£４、家族£１３、

**②特色：**

ア　特徴

地元のニーズに合わせた施設になっている。

→都市を取り巻く環境により、住民が安全のために気をつけるポイントが異なるため。

⇒全国各地に各地域のニーズに合わせたセンターを設置することが必要である。

ウ　機能

消防・警察・救急・沿岸警備隊の協力のもと、子ども向け安全教育センターの一つとして機能し、Junior citizen program（２週間／年）の一環として利用される。

エ　設置目的

Ｓａｆｅｔｙ　ｍｅｓｓａｇｅ（安全メッセージ）を出し、人々の間に安全を植えつけること。犯罪には特に焦点を当ててはいない。犯罪を減らすことには関連しているが、あくまで安全教育が目的である。

**③利用状況：子どもだけではなく、大人も利用する。**

ア　子どもの安全教育施設としての利用（子ども１３，０００人／年）

※ドーセット消防緊急サービス局は、第２・第５学年の安全教育を奨励。

消防が協力する理由

イ　子どもが事故にあった場合の政府の所要経費は£２５０，０００にも上り、その削減を目指しているとのこと。

→６～７歳から安全メッセージを教え、９～１０歳で強化することにより、生涯にわたって、安全メッセージを植えつけることができると考えている。

⇒全国カリキュラムで「子どもたちは安全について知らなければならない」と制

定されている。

※学校の長期休暇中のみ、家族向けツアーが行われている。

（利用者の割合は、学校：家族＝１０：１）

ウ　警察学校、大学の鑑識トレーニングの場としての利用（施設使用料£５００）

エ　年一回のオープンデー

→施設の地域社会へのプロモーションと資金獲得（バザーなど）が目的。

**④体験所要時間：**

**１ｄａｙ　ｓｏｃｉａｌ　ｓｔｕｄｙにかかる時間（２レベル）**

→５－７歳版は２時間（６個のシナリオの学習）

→９－１０歳版は２．５時間（９個のシナリオの学習）

⑤評価

ア　コンピューターオンライン上でテストでセンター来場前と来場後に学校で行う、子ども向けテスト。

イ　来場前：何を知っていて何を知らないのか把握するためのクイズ。

来場後：センターでどれだけ学習できたか確認するためのクイズ（内容は前回と同じ）。

ウ　アンケート調査を実施。

エ　来場後：各学校に配布されて実施される、学校向け調査。

オ　Ｓtreetwise　Ｓafety　Ｃenter内の事故について

これまでに起こった事故は、２件の怪我（軽症）のみ。事故が極端に少ないのは、ボランティアが、センター到着から退出までの間、子どもをずっと監視・監督しているためである（子ども９人に対し大人２人（ボランティア＋教師あるいは保護者））。

**写真１－3　昼間の風景**

**写真１－4　夜間の風景**

**（３）　ボドミンのＦlashpoint　Life－skills　Ｃenter**

実査期間；２００８年３月

担当者　；宮田美恵子・楊　奈穂

**①施設概要**

ア　設立：１９９８年

イ　トレーニング開始時間：午前１０：００～／午後２：００～

＊基本的に一日２セッション。要望に応じて夜間も実施。

＊土日祝日は休み。

ウ　建物：コーンウェル州が所持していた建物(倉庫)。

エ　建設費用：£１，５００，０００

オ　協賛

・Ｒｏｓｐａ（交通安全協会）

・コーンウェル州

・保健局など

キ　人的構成：スタッフ２名および３０名のボランティアガイド

ク　運営委員会：スタッフ２名および２名のボランティアガイド

ケ　周辺環境：中古車販売や、車の修理工場、住宅街の中にある。

コ　アクセス

Bodmin Parkway Stationからタクシーで５分。（２００８年3月時点で£10）

ボドミンの町の中心より徒歩約１０分。（１マイル＝１．６キロ）。

サ　入場料；£2.5（６－７歳は£1.5）

シ　講習の所要時間：６－７歳→３５分～１時間

８歳以上→２時間

大人→４０分～２時間（ニーズによる）

ス　利用状況

６歳以上の児童から、70歳以上まで。子どもたちの両親、高齢者まで体験学習を受けることができる。１セッションにつき最大４０名まで可能。児童に対しては、教育委員会を通して学校に呼びかけ、見学者を募集。高齢者に関しては、役所を通して募集。特に若い母親・父親に関しては学校を通して募集する。

**②施設の目的**

子どもから大人まで、実際に天災や犯罪の危険な場面を体験し、どうしたら被害にあうことを避けられるか学ぶ。そして、自分はもとより他人も含めて安全に生きていくことはどういうことかを実践的に学ぶ。

**③Flashpoint Life-skills Centerの 特徴**

ア　子どもだけでなく、大人への安全教育も行っている点

高齢者や、１０代の母親などに対するカリキュラムを別に設けている。

イ　行政のバックアップを全面的に受けている点

資金のみならず、人的支援（警察や消防署など）も受けている。

ウ　臨場感あふれる対応

消防署への緊急電話（１１２番）や警察署への緊急電話（１１９番）などの練習の際に、現場の消防士や警察官に対応してもらう。また、１４歳以上の生徒に対するドラッグや万引きの講習は、現場の警察官が行う。

エ　年齢別に講習の内容をアレンジしている点

オ　域色が強い点。

土地柄多い海難事故や洪水に関する学習、また自転車事故に関する学習内容が充実している。地域のニーズをうまく取り入れている。

カ　事前・事後学習が充実している点。

事前学習では、これから行うことに対する心構えを教え、事後学習では、たくさん体験した中で最も覚えていなければならないことを再度確認する。10－11歳の場合、緊急電話の番号、電話をした時に相手に告げなければならない項目をまず確認する。またヘルメットに入れた卵と、袋に入れただけの卵を落とす実験を通し、自転車に乗る際のヘルメット着用の重要性を説く。

**④具体的内容**

**４－１．セッションの体系**

①　９歳以上の児童の場合

ア）１シーン８分で、１２シーンを回る。

イ）事前及び事後指導を各１０分ずつ行う。

ウ）１グループ５人の児童に対し、１人のボランティアガイドがつき説明を行う。子どもとのアクティブな質疑応答をしながら進んでいく。

エ）ボランティアガイドの、演劇性の高い説明が子供たちをひきつけている。

オ）五感を使った学習方法がたくさん取り入れられている。

EX）・危険な場所と思われる個所に自分で「×」印のカードを置き、あとでその理由を述べる。

・部屋の外から煙が入り、自分たちでその煙をふさぎ、消防署に通報する。

・留守と想定される家の中に泥棒として侵入し、普段とは逆の立場を体験することから、何が危険かを考え学ぶ。

・次のシーンに移動する前に、ボランティアガイドが次のシーンを予告する、できるだけ質疑応答を多くするなど、子供たちを飽きさせないよう　な工夫がみられる。

② 高齢者の場合

施設全体を約４０分で見学するが特に侵入盗に関する詳しい説明を受け、被害にあわないための予防策、および被害に遭った時の対応を、実際の体験学習を通して学ぶ。

③ 若い母親の場合

特に、キッチン周りや子ども部屋、リビングの危険要素、子どもが受ける恐怖感などに関してレッスンを受け、どうすれば子どもが被害にあわないか体験学習を行う。

**⑤施設内容**

子ども部屋、リビング、キッチン、洪水学習部屋、公衆電話、道路、列車、浜辺、農場、玄関、倉庫、パソコンの部屋（internetの学習）

**⑥ボランティアガイドに関して**

ア　登録人数：３０名

イ　交通費は支給（ほとんどが車で通っているため、ガソリン代を支給）

ウ　ボランティアガイドのトレーニング方法

主にシャドーイングの手法をとり、トレーニング中のガイドは４，５回ベテランのボランティアガイドについて、ベテランの真似をし、リピートしながら仕事内容を習得する。自分ひとりでできるという自信が持てるようになるまでシャドーイングを行う。

エ　ボランティアガイドは、地元住民よりも、遠方から来ている人が多い。（センターから3マイルから１０マイルまでの距離）。

オ　教師や元エンジニアなど、仕事をリタイアした後の社会貢献の一環として、ボランティアガイドの登録をしているものが多い。

**⑦体験学習後の学校での復習方法**

ア　児童の復習教材

センターでの体験学習後、教師に復習用パッケージを販売し（£2.5）、同封のＣＤ－ＲＯＭによる教材や本を通して、復習をしてもらう。その後、印象に残ったシーンを子どもたちに書いてもらい、センターに送ってもらう。

ウ　評価

教師に評価表を配り、施設の内容やボランティアの説明の仕方等について後日評価してもらい、郵送にて送ってもらう。

**⑧運営に際しての問題点**

ボランティアのリクルート・確保に最も苦労している。ボランティアからの紹介や、ボランティアセンターからの推薦、新聞広告などを通して行っているが、長期かつ定期的に来てくれるボランティアを確保するのは難しい。

**写真　１－5　　恐怖に感じた時の体の反応風景　　写真１－ 6　電話のかけ方練習**

**（４）　英国実査のまとめ～我が国の今後の体験教育への示唆～**

英国実査によって、今後我が国で進められようとしている体験教育に幾つかの示唆を得た。

＜犯罪防止に関して＞

１．いずれの施設も、犯罪防止に関しては殆ど対応していない。火災、バリアフリー、交通事故等である。

２．万引き、暗がりでの対応等が各施設当たり１カ所ある程度である。

３．そういった点で、我が国で試みられようとしている体験施設も、世界初の「犯罪被害防止目的総合施設」としての意味をもつと見られる。

＜学校との連携に関して＞

１．学校と体験施設の役割分化を適格にする。

２．学校での事前・事後指導が重要である。

３．学校と施設を結んだＥ－ラーニングシステムの導入をする。

４．教育委員会の推薦の役割が重要である。

５．復習の教材の開発をする。

＜指導方法・教材に関して＞

１．適格なインストラクター養成の必要性がある。

２．インストラクターの養成方法として、テキストで学ぶだけではなく、徹底したシャドーイング（物まねとリピート）が重要な指導法である。

３．体験した子どもへの修了証明書等の発行が動機付けに必要である。

４．ただ体験するだけではなくロールプレイングも指導方法の重要な一部である。
５．教材のパッケージ化が必要である。
６．施設での事前・事後学習が重要である。

＜指導方針・内容に関して＞

１．その場その時の安全確保とともに「自分や他人の身を守る」に置く知識だけでなく、実際に役に立つ行動力の形成
２．国全体の安全教育の体系化の一つとして、体験教育のプログラムが考えられなければならない。
３．若い母親・高齢者に対する安全体験教育の必要性も高まっている。
４．センター自体もリピート（リピーター）を考えておく必要がある。
５．全般的な安全教育のプログラムとともに、地域の特色に根差したプログラムも求められる。

＜施設に関して＞

１．持続性のある財源の保障をする必要性がある。
２．音や煙、においや手触りなど、五感にうったえる仕組みが重要である。
３．建物よりも素朴な仕掛けの設備をする場合には、安全教育に関する知識だけではなく、演劇的要素などを含んだ人材育成がより重要である。
４．工場や倉庫など、既存の建物を利用することは大いに有効である。

**＜参考文献＞**

１．　タイトル：The Streetwise Safety Centre Teachers’ and Parents’ Study Pack
発行者：The Streetwise Safety Centre
発行年：1999

２．　タイトル：VOLUNTEER GUIDES
発行者：The Streetwise Safety Centre
発行年：1999

３．　タイトル：streetwise NEWS 2003
発行者：The Streetwise Safety Centre
発行年：2003

４．　タイトル：DOES YOUR TEAM HAVE WHAT IT TAKES?
発行者：The Streetwise Safety Centre

発行年：1999

５．　タイトル：Streetwise Safety Centre Scenario Scripts
発行者：The Streetwise Safety Centre
発行年：2006

＊FLASHPOINT LIFESKILLS CENTER
１．　タイトル：CD ROM FOR TEACHERS(CD-ROM)
発行者：Flashpoint Life-skills centre
発行年：2007
２．　タイトル：Go safely with Road Safety
発行者：Cornwall County Council
発行年：2006
３．　タイトル：The-safety CD(CD-ROM)
発行者：SeaSafety
発行年：2005
４．　タイトル：STAYING SAFE in Cornwall
発行者：Cornwall County Council
発行年：2006
５．　タイトル：Arrive Alive
発行者：the Department for Transport with advice from LARSOA and ALBRSO
発行年：2006
６．　タイトル：Drugs
発行者：Cornwall and Isles of Scilly NHS
発行年：2002
７．　タイトル：helping keep children safe
発行者：Devon & Cornwall Constabulary Youth Issues Dept.
発行年：2007
８．　タイトル：Switched On Kids
発行者：ELECTRICAL SAFETY COUNCIL
発行年：2007
９．　タイトル：THE FLOOD GAME
発行者：ENVIRONMENT AGENCY
発行年：2007
１０．タイトル：Electrical Safety Educational Fun Kit
発行者：ELECTRICAL SAFETY COUNCIL

発行年：2008

１１．タイトル：Volunteer Guide

発行者：Flashpoint Life-skills Centre

発行年：2007

≪設置されるモデル的体験施設の形態やその内容に関する事前研究≫

（第２グループ　責任者　田中賢　日本福祉大学情報社会科学部准教授）

本研究においては、子どもの犯罪への危機対応への行動を分析すると同時に、必要とされる体験施設の設備の形態や内容を検討する。研究の過程は図２－１の様である。

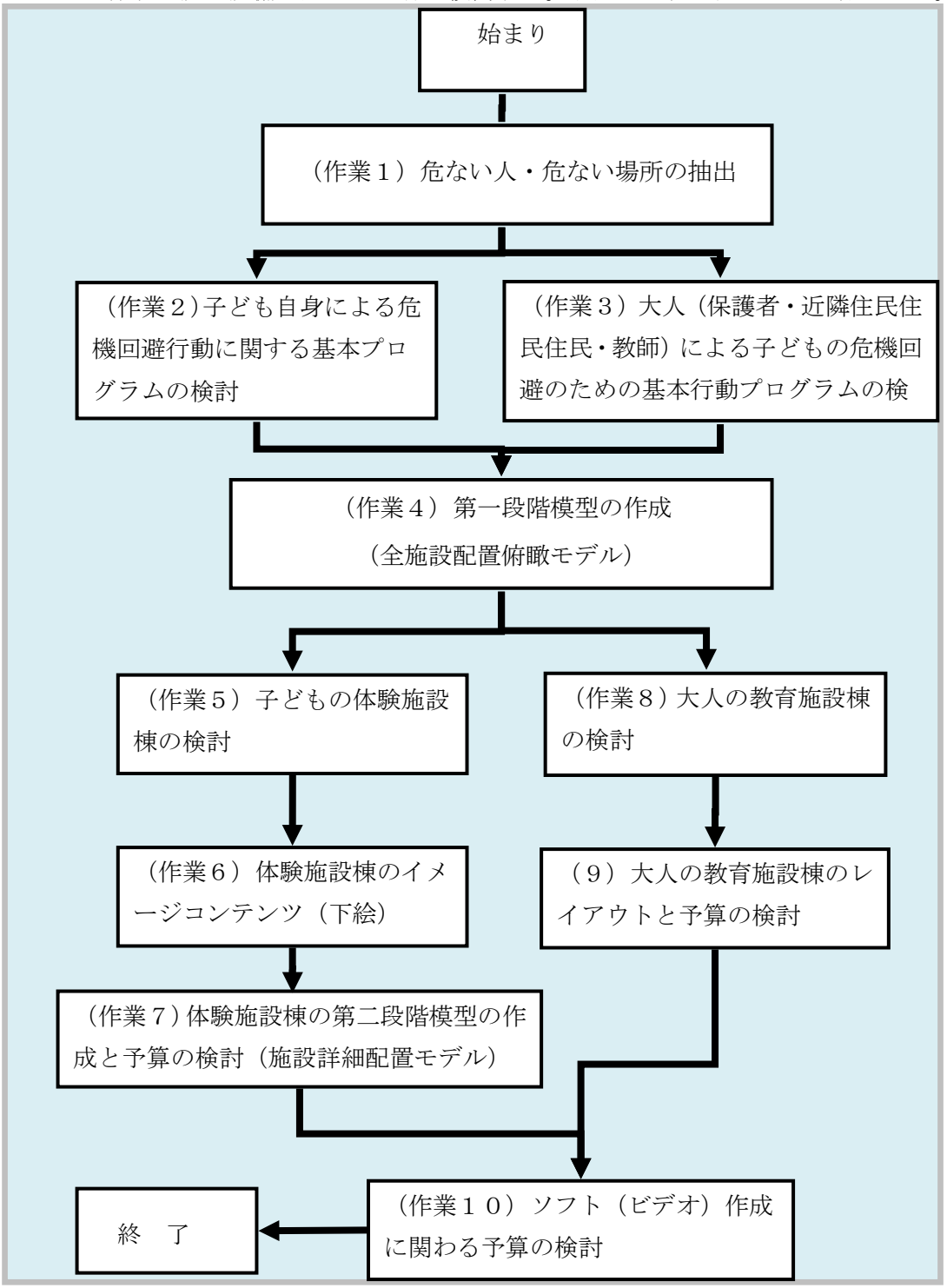



**図２－１　研究過程図**

## 作業１：危ない場所・危ない人の抽出

### （１）危ない場所

先の「総合調整グループ」で実施された元犯罪者に対するヒヤリング調査で得られた１２の犯罪発生危険空間を基に「（子どもが犯罪に遭遇するするかも知れない）危ない場所」を定めた（図１参照）。この１２の危ない場所を集めて「危ない環境遭遇サーキット」と呼ぶ。

なお、このサーキットを構成する１２の「危ない環境」が、選ばれたかの理由も図中に示されている。この理由を基に、子どもの危機回避に関する教科書が今後検討可能となる。

### （２）危ない人

元警察官グループに委託した調査（清永・松野「不審者の研究」2007年）、及びその結果を踏まえた元犯罪者と犯罪学・犯罪心理の研究者による検討によって、子どもを危機に遭遇させる可能性のある人を、「変な人」「怪しい人」「危ない人」として以下のように定義した（表２－１）。

**表２－１　　子どもを危機に遭遇させる可能性のある人**

| | 条件 | 具体的人物像 | 対応 |
|---|---|---|---|
| 変な人 | その場、その時、その人に似つかわしくない人 | ・あまり見かけない人<br>・見つめられる、話しかけられる、挨拶されることを嫌がる人<br>・態度や言葉、歩き方、服装が似合わない人 | ・目を合わさないが、目の隅で注意する |
| 怪しい人（不審者） | 変な人＋自分や家族、友だちや地域の人々に狙いを定めているのではないかと見られる人、理解しがたい不自然な行動を取っている人 | ・周辺をウロウロし、離れない人<br>・視線が自分や自分たちを中心に離れない人<br>・必要がないのに、何やかやと話しかける人 | ・目を合わせず、サッサと歩く<br>・場所を変える、引き返す、避ける、人が来るのを待つ<br>・防犯ブザーを引き抜く用意をする。 |
| 危ない人 | 変な人＋怪しい人＋特定の標的に的を絞って行動している人、あるいは凶器（となりうる物）を持っている人 | ・直進してくる<br>・突然Uターンしてくる<br>・形相が違う | ・来た道をダッシュで引き返す<br>・人のいる方向に走って逃げる<br>・近くの家に逃げ込む<br>・防犯ブザーを引き抜く |

**作業２：子ども自身による危機回避行動に関する基本プログラムの検討**

本作業では、宮田美恵子をリーダーとする「施設でなされるモデル的教育カリキュラムの事前研究」の検討結果を基にしつつ（「施設でなされるモデル的教育カリキュラムの事前研究」参照）、子ども自身が自己の危機回避にどのような行動をとれば良いのかの基本行動プログラムの作成を行なった。この結果は、子ども自身による危機回避行動の形成（教育）に必要とされる設備の機能・形状・種類等について検討する資料となった。

（１）子どもの「逃走目標距離」の測定作業

清永等は、犯罪者は被害者（子ども）を追いかけて捕まえる事が出来なければ諦めるか（やる気度）、逆にいえば危機に遭遇した子どもがどの位の距離逃げればよいのかの実験を行った（2007年　文部科学省資質の高い教員養成プログラム（GP）研究、「犯罪者の基本行動と子どもの安全基礎体力」）。この距離のことを、以下「逃走目標距離」と呼ぶ。非験者は元犯罪者である。実験の結果、犯罪者は被害者を２０ｍ追いかけて捕まえきれなければ諦めることが判明した（図２－２）。

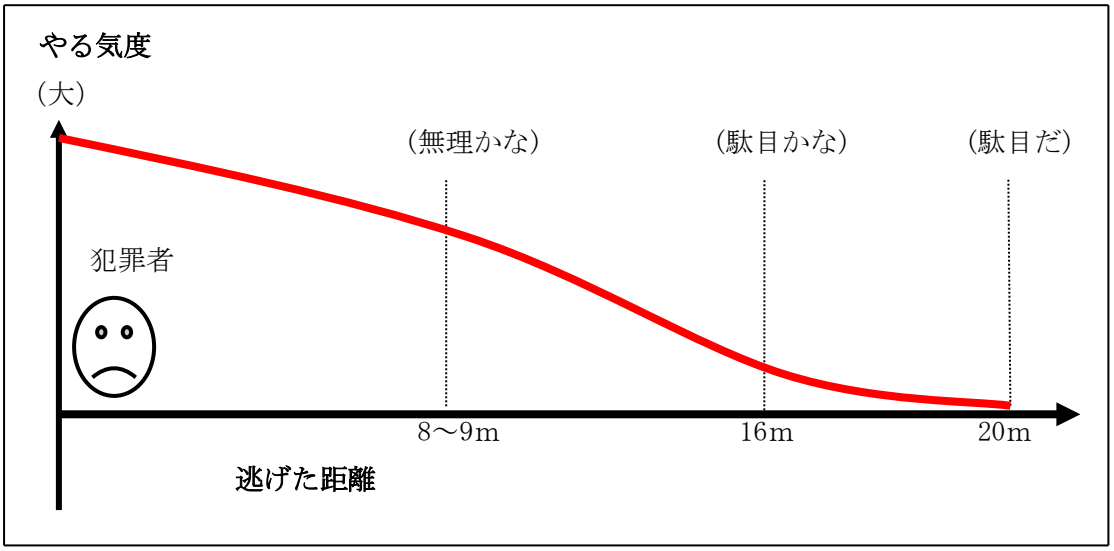



**図２－２　犯罪者のやる気度の変化**

（２）子どもの「逃走達成空き空間距離」の測定作業

清永等は、先に判明した「逃走目標距離＝２０ｍ」を子どもが逃げ切るには、犯罪者の何メートル手前から走り出さねばならないかの実験を行った（2007年　上記GP研究）。この距離のことを、以下「逃走達成空き空間距離」と呼ぶ。非験者は、小学校1年と3年の男女4名、及び大学3年の男子1名（同年齢の男性よりも走力は「やや早い」と自己評価）である。実験は、ランド

セルと手にバッグを持った状況、両者を持たなかった状況で行われた。
実験の結果、ランドセルとバックを持たなかった場合は犯罪者の手前４ｍからの逃走で年齢・性に関わらず逃走できた。しかし、ランドセルとバッグを持った場合は、１０～１１ｍの地点で捕まった。ランドセルとバッグを持った場合は、犯罪者の手前６ｍの手前からの逃走が必要なことが確認できた（図２－３）。

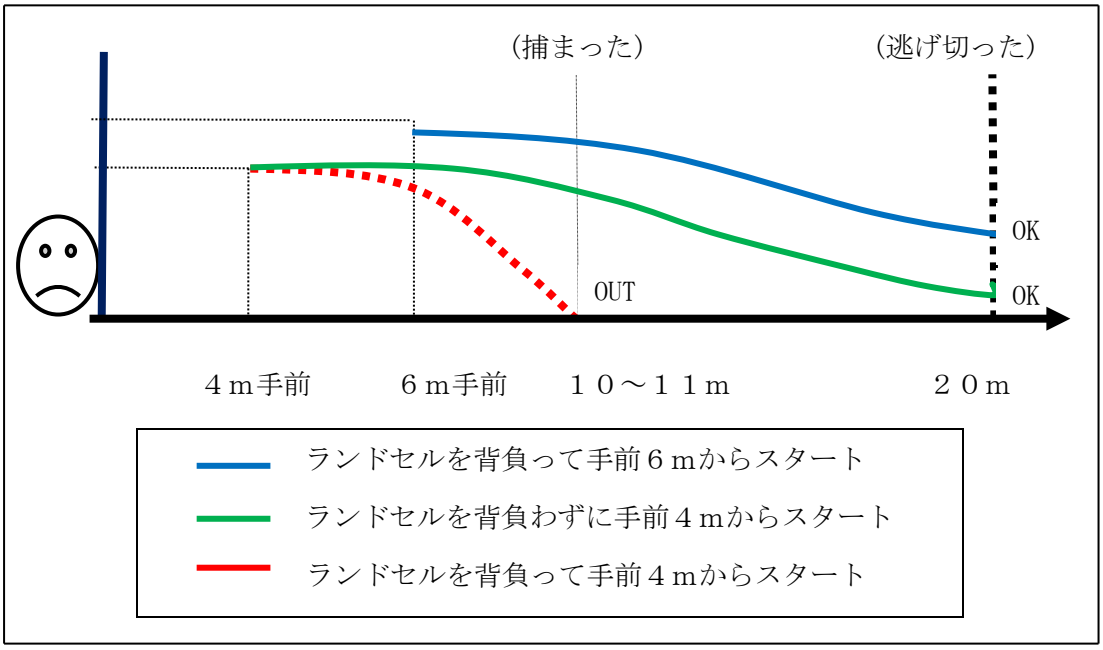



**図２－３　　犯罪者から走り逃げ始める距離**

（３）子どもの危機回避行動過程の詳細検討作業

先に判明した逃走目標距離（２０ｍ）と逃走達成空き空間距離（４ｍと６ｍ）を基準に、子どもは自己の危機回避のため、どの様な行動をとれば良いかの検討を行った。この結果は、子ども自身による危機回避行動の形成（教育）に必要とされる設備の機能・形状・種類等について検討する、あるいは教育の内容を検討する基本資料となった。

作業は、子どもの「通常時」の状態から始まり、「変な人との遭遇時」、「不審者（怪しい人）との遭遇時」、「危ない人との遭遇時」（表1参照）と危機が深化して行きに伴い、どのような行動を取る事が望ましいかを元犯罪者、犯罪学・教育学・社会心理学等の専攻行研究者による討議で策定した（表２－２～５）。

①「通常時」の段階で特に注意すべき事

不審者が接近してきた時、携帯電話を使用して異常を家族に告げる、あるいは不審者への威嚇効果があるとされる。しかし、通常時における携帯電

話の使用は、前方や周囲への注意力を低下させることが実験で判明した。また、同様な注意力の低下は、「ふざけやペチャクチャとしたかいわを交わしつつ集団で歩行する際にも生じる。体験施設での「通常時」の体験を通しての教育にこうした点の指導の重要性が強調される。

②「変な人との遭遇時」の段階で特に注意すべき事

犯罪被害にあった子どもの多くは、その危機の事前段階で何らかの話しかけ(コミュニケーション)が加害者からなされている。この話しかけは、言語による話しかけだけでなく、動作（例えば、子どもから見て面白く興味を引く等の)や眼差しの投げかけなど非言語(メタコミュニケーション)でなされる場合が多い。こうした、非言語領域からの対応に、「目を合わさない事」と同時に「変な人を意識しておく」ことが重要となる。

体験施設での「変な人との遭遇時」の体験を通しての教育にこうした点の指導の重要性が強調される。

③「不審者との遭遇時」の段階で特に注意すべき事

嫌な事を「いや」としっかり言える事が大切となる。ただ、「いや」とキッパリいうのではなく、相手によって様々なバリエーションが考えられる。こうした社会的対応技術（SST）を身につけることが危機遭遇直前の段階では非常に重要となる。

体験施設での「不審者との遭遇時」の体験を通しての教育にこうした点の指導の重要性が強調される。

④「危ない人との遭遇時」の段階で特に注意すべき事

「全てを捨て、あるいは投げつけて走る」とあるように、身軽になって走る事が大切なる。また、どこにでも「飛び込む」ことが重要となる。

体験施設での「危ない人との遭遇時」の体験を通しての教育にこうした点の指導の重要性が強調される。

⑤全体を通し

どういった人が「変な人、不審者、危ない人」を判別させる体験教育が何よりも重要である。この点の教育が明確になされねばならない。

表２－２　通常時の子どもの行動

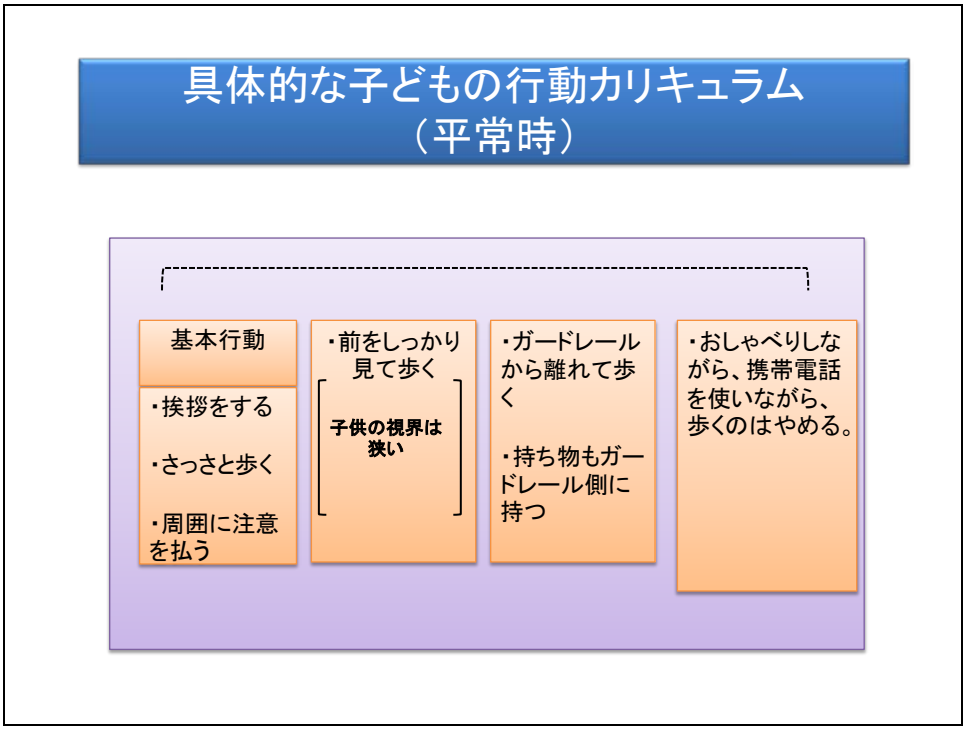
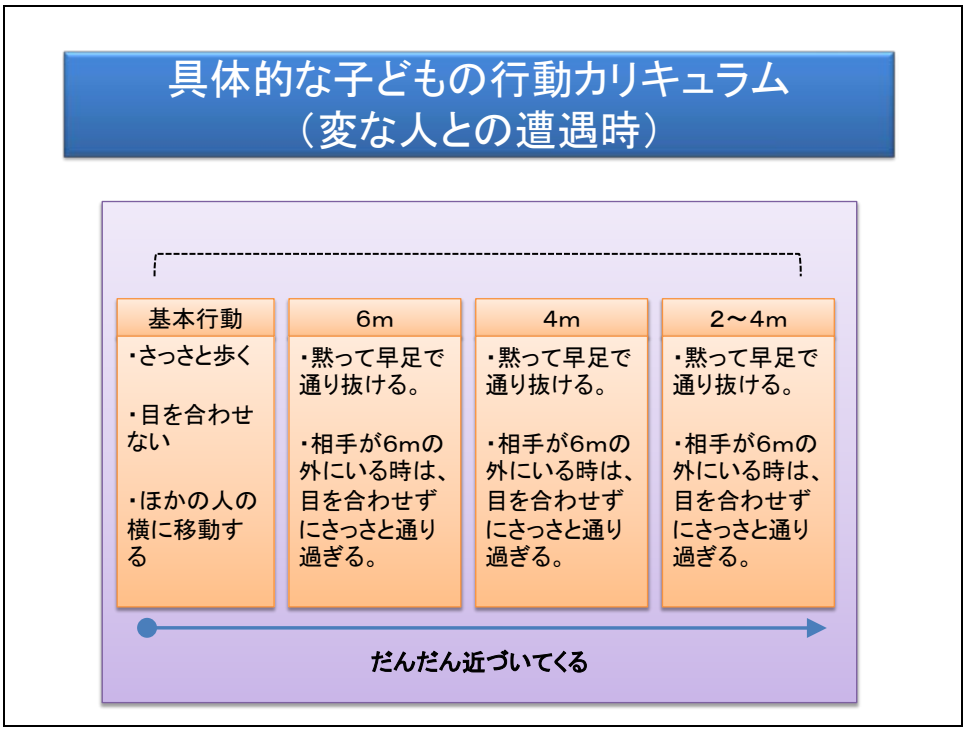



表２－３　変な人と遭遇した時の子どもの危機回避基本行動




注：表中の２～４，４，６ｍという数字は、先の逃走達成空き空間距離

表２－４　不審者と遭遇した時の遭遇した時の子どもの危機回避基本行動

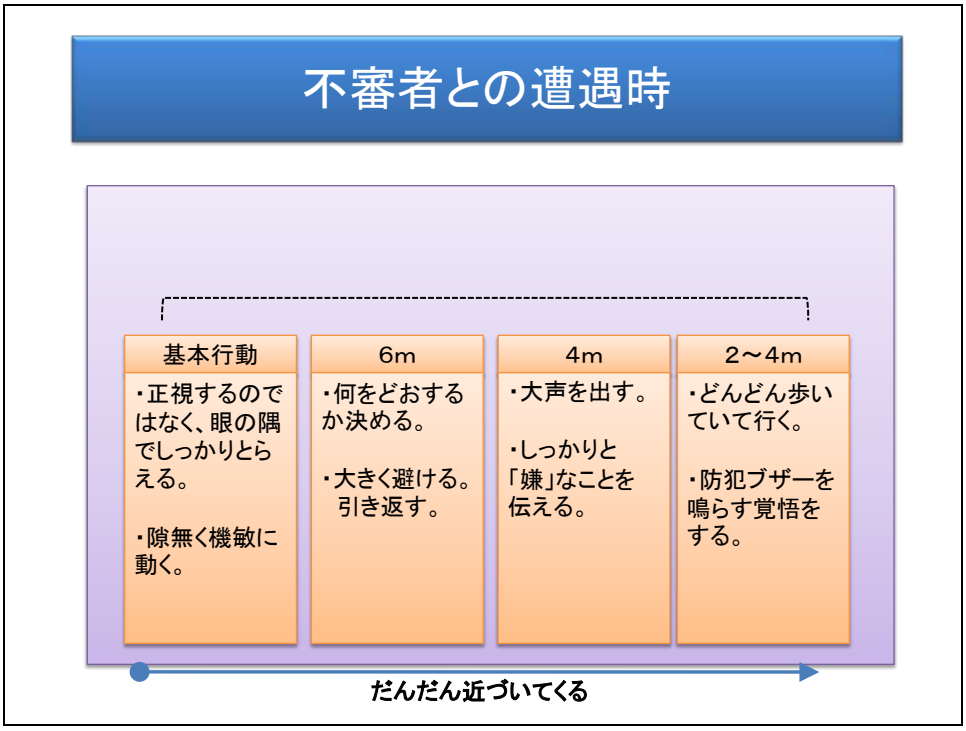
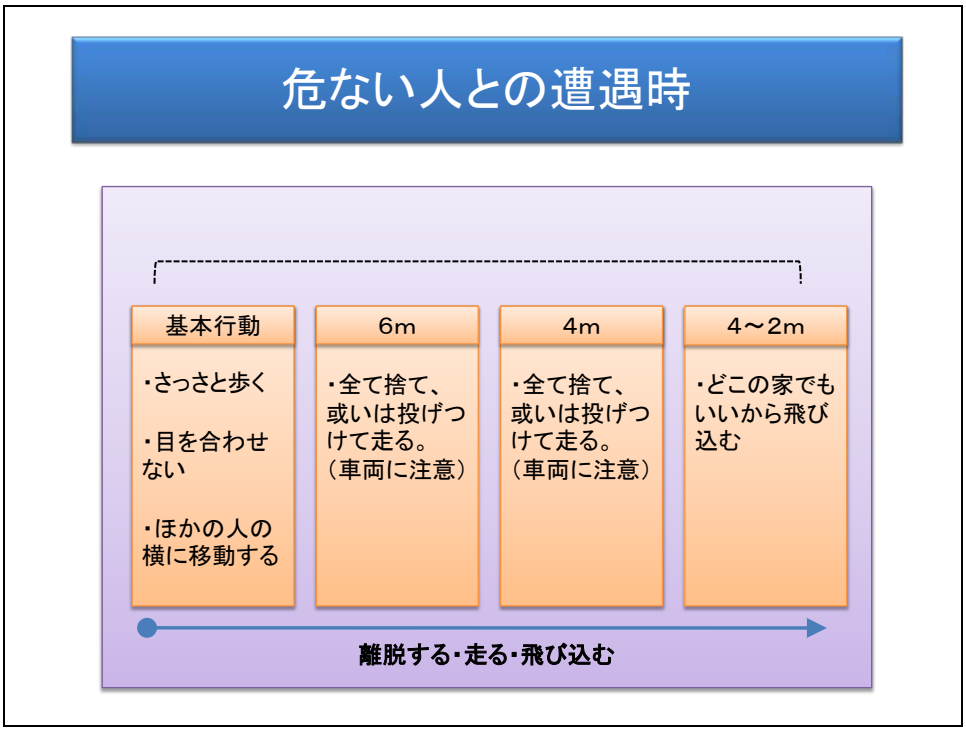



表２－５　危ない人と遭遇した時の子どもの危機回避基本行動



### 作業３：大人による子どもの危機回避のための基本行動プログラムの検討

子どもの安全確保は、子ども自身の危機回避行動だけでは不可能である。保護者、近隣住民、教師がいかに効果的な行動を取るかが重要である。

本作業では、子どもの危機遭遇の事前、事中、事後に保護者・近隣住民・教師等がどのような行動を採れば良いのか基本行動プログラムの作成を行なった（図２－４）。

この結果は、そうした大人の行動形成（教育）に必要とされる設備の機能・形状・種類等について検討する基本資料となった。

子どもの危機に対応する大人の行動の変化を予防的定常行動→ 問題解決解消行動→問題収束事後行動と段階的に捉え、その段階ごとにどのような対応を取る事が必要かを検討した。

（１）「予防的定常行動段階」での狙い

- 子どもの行動変化を読む力を付ける
- 変な人―不審者―危ない人を判別する力を付ける
- どんな子どもが危機に陥りやすいかを判別する力を付ける
- 日常の円滑な保護者―近隣住民―教師―自治体―警察間の関係を結ぶ力を付ける

（２）「 問題解決解消行動段階」での狙い

- 学区・町内で変な人―不審者―危ない人が出現した時に対応する力を付ける
- 子どもが帰宅しなかった時に保護者―教師―近隣住民―自治体が対応する力を付ける
  （学校・警察等への電話のかけ方、近隣住民の対応等）
- 問題が長期化した時の保護者―教師―近隣住民―自治体等が対応する力を付ける

（３）「問題収束事後行動」での狙い

- 危機に遭遇した子どもへ保護者―教師―近隣住民が対応する力を付ける
- 危機後の保護者―教師―近隣住民が相互に取るべき態度の力を付ける

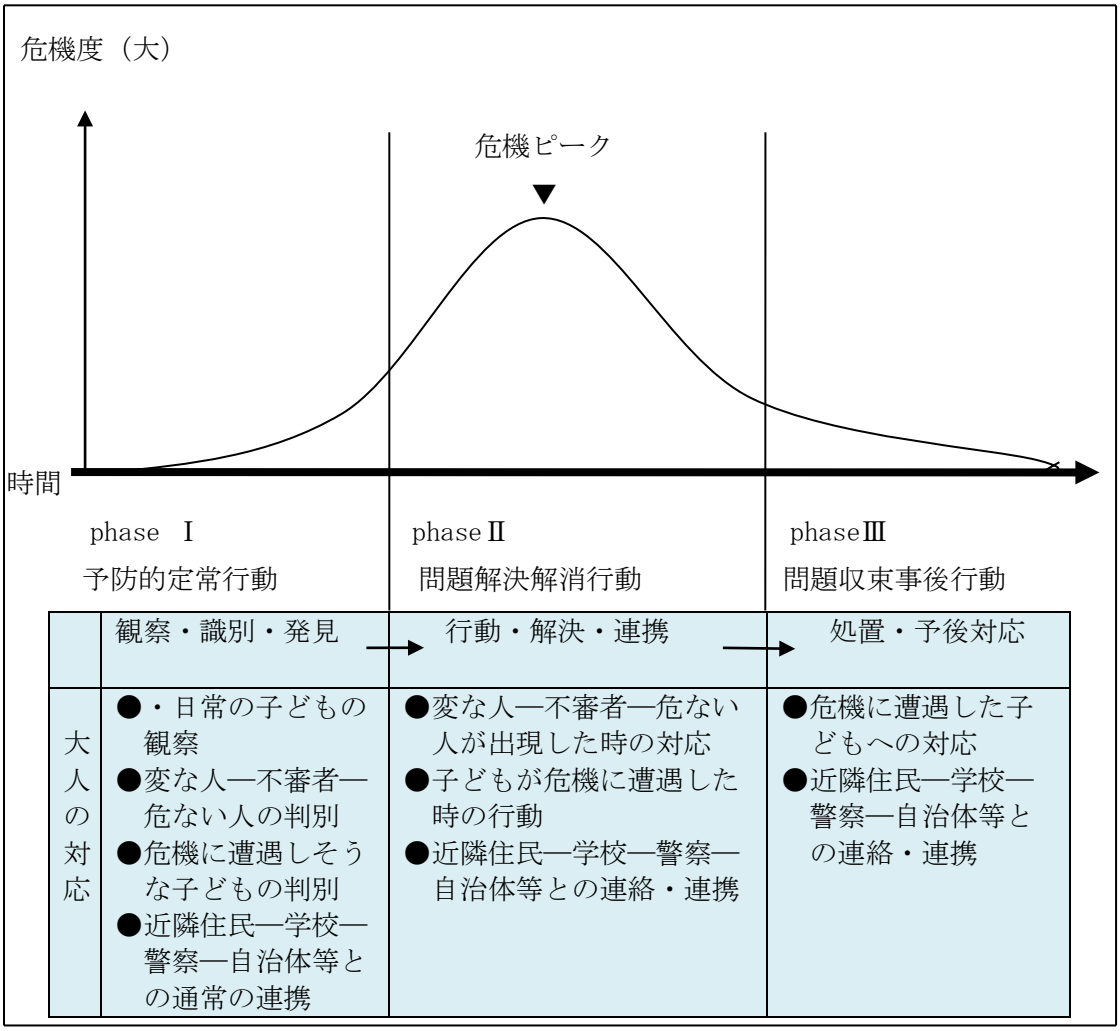



**図２－４　子どもの危機への大人の基本的対応**

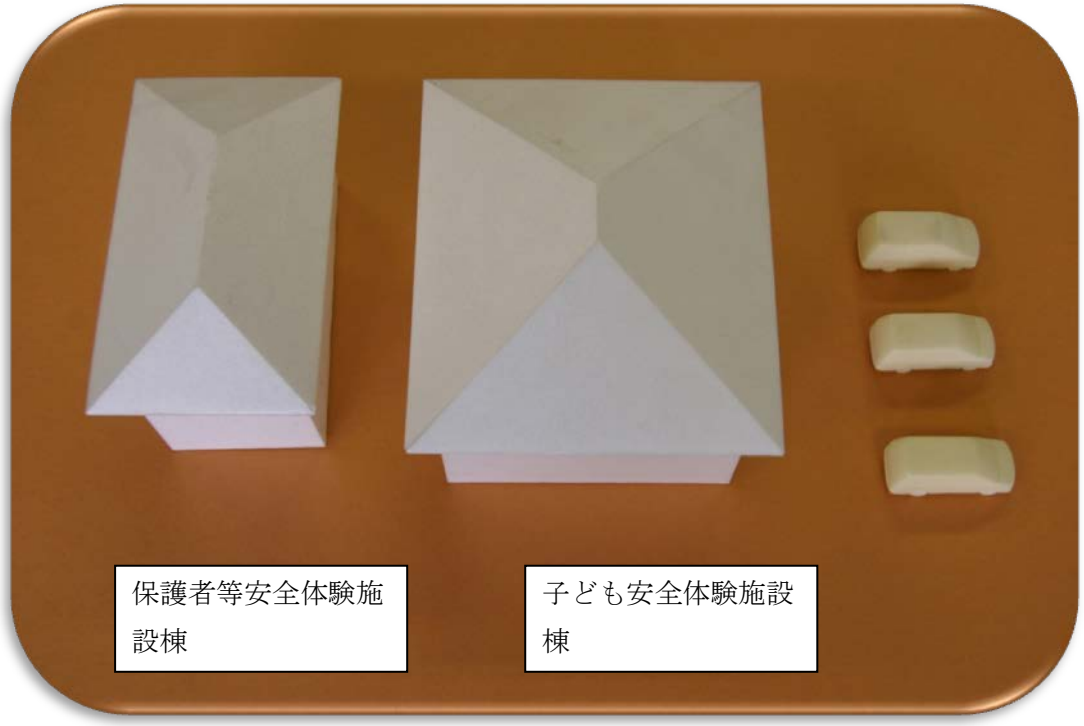
**作業４：第一段階模型の作成（全施設配置俯瞰モデル）**

子ども棟・大人棟（保護者・近隣住民住民・教師等が学ぶ）を中心にする施設を俯瞰する模型を作成した（模型２－１）。

この模型を中心に、それぞれの棟にどの様な設備を設置するかが検討された。

作業５～７は「子どもの体験施設棟」に関する作業を行った。

作業８は「大人の体験施設棟」に関する作業を行った。




模型２－1　　保護者等・子ども安全体験施設

**作業５：子どもの体験施設棟の検討**

**第１段階：**

元犯罪者、犯罪学・教育学・社会心理学・建築学・都市工学等の研究者の検討集団を編成し作業を進めた（写真２－１～２）。作業に当たっては、先に述べたイギリスの３つの体験施設実査の結果が参考とされた。

写真２－１　集団討議のシーン

写真２－２　　元犯罪者の評価シーン

**第２段階：**

**討議の結果、子どもの体験施設は、以下の４つのゾーンに分ける事とした。**

**① Ｓ１：事前・事後学習ゾーン**

本ゾーンにおいては、来館した子どもへの「犯罪に関する基礎的知識」を習得さすと同時に、体験前・後の危険察知能力・危険回避能力のレベルを比較し、施設での体験が子ども自身の安全基礎体力の形成にどの程度の効果をもたらしたのか、また、どの設備が子どもたちの安全基礎体力の形成に有効であったのか等を評定する。

**② Ｓ２：危ない環境遭遇サーキット**

登下校時を含む子どもを囲む物理的環境の内、犯罪に遭遇する可能性の高い危険な１２場面を抽出し、子どもたちが周回しつつ「犯罪からの危機」を体験し危険察知能力を高める「物理的危機遭遇環境ゾーン」とした（図２－５。写真２－１１）。

Ｓ２では全天候型とし、日中・夕暮れ・夜間などの時間や晴天・雨天などの天候、街路灯などの数や照度をコントロールし、同一箇所でも環境の変化で危険度合いが変化することまでも示すことを考える（写真２－７～１０）。

図２－５　　１２の危険な物理的環境

**③ Ｓ３：変な人等体験広場**

上記の「危ない環境ゾーン」が物理的環境における「子どもの危機」を中心としたのに対し、Ｓ３のゾーンは、「変な人は誰だろう」「子どもの眼には見えない」「子どもの耳には聴こえていない」といった社会的環境を中心に危険察知及び危機回避能力を高めるための「変な人等体験広場」とした。手法としては、インストラクターによるロールプレイング学習とビデオ画面を見ながらの視聴覚学習を行う。このロールプレイングは、子どもの発達段階に応じ、Ｓ２ゾーンとリンクさせ、より高度なロールプレイング学習へとステージをあげることとする（写真２－11）。

**④ Ｓ４：こんな時どうする体験教室**

Ｓ２とＳ３で学習した危険察知及び危機回避能力を実際に身につけ（体得する）試行する「こんな時どうする体験教室」とした。インストラクターの指導の下に、「走る」「駆け込む」「叫ぶ」「話す・伝える」ことをインストラクターの指導の下に、発達段階に応じたプログラムの下に学習する。

**作業６：子どもの体験施設棟のイメージコンテンツ（下絵）の作成**

上記の４つのゾーンの内、物理的「危ない環境遭遇サーキット」を構成する１

２の物理的環境について、「なぜ、そこは危ないのか」の理由を検討しつつ描画した（模型下絵２－１～１１）。

**作業７：子どもの体験施設棟の第二段階模型の作成と予算の検討**

上記作業７のイメージコンテンツを基にＳ２を中心としたスタディ模型を作成し検討した（写真２－３～６）。

このスタディ模型を基に、「子ども棟」の設備に必要とされる予算が検討された。

予算を計算する上でする上での初期設定として、既存の体育館や工場などでさまざまな理由により使用しなくなった建物内をコンバージョンして用途変更することとした。

比較的大型体育館を「建築設計資料集成」より選定し、これをベースに用途変更案を作成した。これにより合理的で効果的なコスト試算を行った（予算表２－１～１２）。

必要となる予算は、子ども棟の設備として合計＝３６９，１７２，５００円と計算された。

**作業８：大人の教育施設棟の検討**

大人（保護者・近隣住民住民・教師）の「子供見守り力」を強化するための教育を行う場としての教育施設として必要な設備を検討した。

この教育施設で行われる大人教育の基本的目標は、図２－６の「　子どもの危機への大人の基本的対応」で示した内容で、具体的には、予防的定常行動～問題収束事後

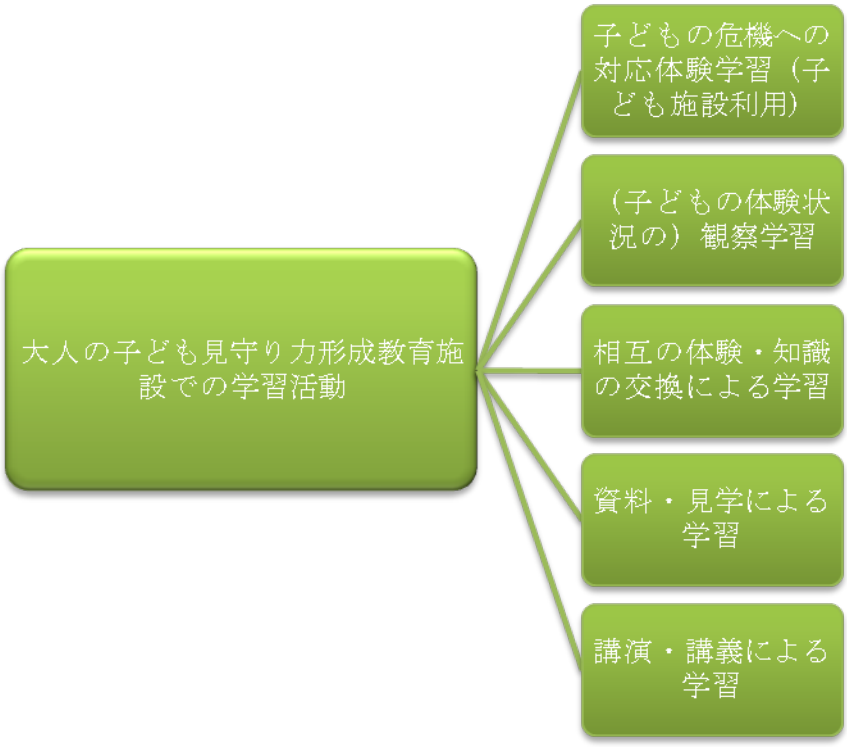



**図２－６　　大人棟でなされる学習活動**

行動までに必要とされる知識や行動が体得されることがあげられる。

そのために、子ども体験施設を活用しての体験教育を受けることとなる。

また、この大人自身の体験教育の他に、４つの学習がプログラム化され、それを実行する設備が求められる。

**作業９：大人の教育施設棟のレイアウトと予算の検討**

上記作業８のコンテンツを基に大人棟を中心としたイメージ模型を作成し検討した。

この模型を基に、「大人棟」の設備に必要とされる予算が検討された（予算表２－１１）。

予算を計算する上でする上での初期設定として、既存の体育館や工場などでさまざまな理由により使用しなくなった建物内をコンバージョンして用途変更することとした。

必要とされる予算は、大人棟の設備として合計＝６０，０２３，０００円と計算された。

**作業１０：ソフト（ビデオ）作成に関わる予算の検討**

以上の物理的設備に加え、子どもと大人の体験施設においては、大型スクリーンを用いてのバーチャルな映像で「犯罪者の基本行動」「不審者の行動と様相」「危ない時にはこうしよう」などのビデオが制作される。これらの映像は、E―ラーニングの基本教材として作成された指導書（教科書）と一体となって全国に送られる。

このソフト（ビデオ）制作費＝１０５，３０４，８１５円が計算された（予算表２－13）。

以上、子ども・大人の体験施設の物理的設備経費とソフト開発費の合計＝５３４，５００，３１５円が本体験施設整備に必要な予算として計算された。

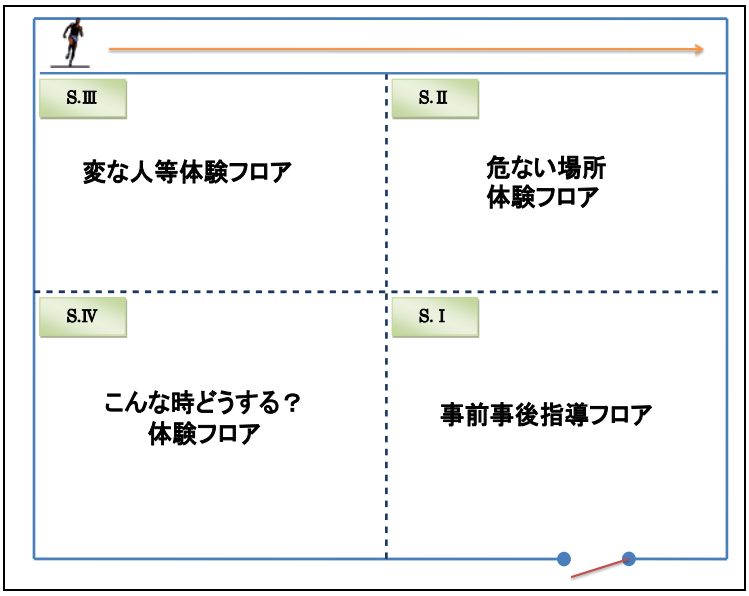



図２－７　4つの体験フロア

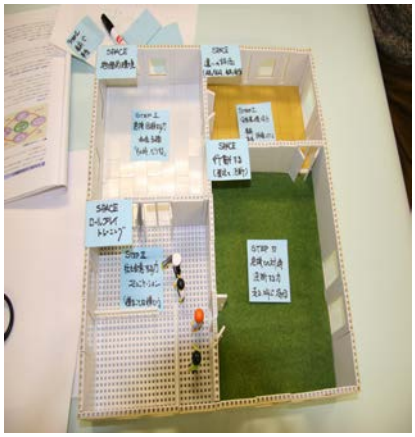


写真２－３　第１段階模型

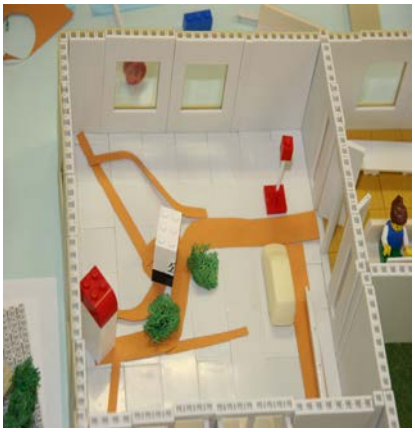


写真２－ ３　　曲がりくねった道

写真　２－５

写真２－６

写真　２－4

写真２－ 5　左の夜間照明（見えない）

写真２－ 6

写真　２―10　左の後ろ（植栽で見えない）

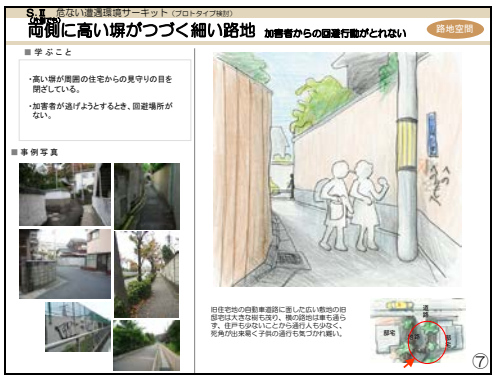
## 写真２－７　　変な人等遭遇体験広場

模型下絵２－１

模型下絵　２－２

模型下絵２－３

模型下絵２－４

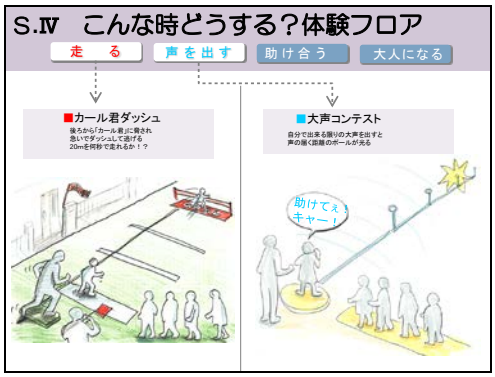



模型下絵　２－５

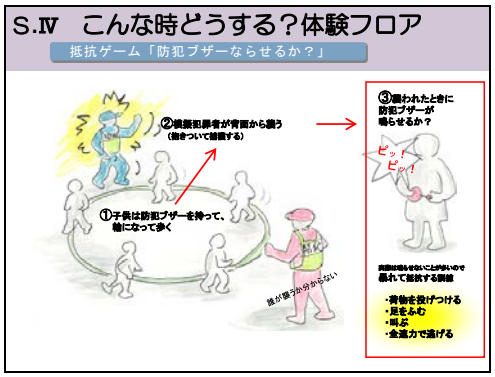
模型下絵２－６

模型下絵２－７

模型下絵２－８




模型下絵　２－９




模型下絵２－ ２

模型下絵２－ ３

完成模型

予算表 ２－1

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価（円） | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| ① ガードレールが切れた直線の街路 | 歩道 | 砂利＋ランマー、<br>コンクリート平板敷詰仕上げ<br>縁石立ち上がり１０cm | 50000／㎡ | 30 ㎡<br>20m×<br>1.5m | ¥1,500,000 |
| | 車道 | 砂利＋ランマー､アスファルト仕上げ<br>車道上に文字表記 | 50000／㎡ | 120 ㎡<br>20m×6m | ¥6,000,000 |
| | ガードレール | 防護柵（要脚部特殊加工）<br>（丸パイプ・ホワイト） | 60000／m | 15m | ¥900,000 |
| | 植栽 | 歩道内の植栽 | 高木：100000／本 | 4 本 | ¥400,000 |
| | 自動車 | ライトバン（スライドドア、スモークガラス）<br>中古車 | 150000／台 | 1 台 | ¥150,000 |
| | 道路標識 | 通学路表示など | 250000／本 | 2 本 | ¥500,000 |
| | 歩道側外観 | Ｓ４との壁 | 200000／m（壁長） | 20m | ¥4,000,000 |
| | | 工場外観フェイク仕上げ（写真張り付けもしくはペイント） | 30000／㎡ | 140 ㎡<br>20m×7m | ¥4,200,000 |
| | | | | | ¥17,650,000 |

予算表 ２－２

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価(円) | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| ② 不審な車が止まっている街路 | 車道 | 砂利＋ランマー、アスファルト仕上げ<br>車道上に文字表記 | 50000／㎡ | 80 ㎡<br>20m×<br>4m | ¥4,000,000 |
| | 自動車 | ライトバン（スライドドア、スモークガラス）<br>中古車 | 150000／台 | 1 台 | ¥150,000 |
| | 車道南側･住宅① | ブロック塀 | 70000／m | 7.5m | ¥525,000 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | ブロック塀内の植栽 | 中木：75000／本<br>低木：50000／本<br>芝生：10000／㎡ | 中木：1本<br>低木：2本<br>芝生：12㎡ | ¥295,000 |
| | | 住宅(内部倉庫利用) | 100000／㎡ | 9 ㎡ | ¥900,000 |
| | 車道南側･住宅② | フェンス | 60000／m | 12m | ¥720,000 |
| | | フェンス内の植栽 | 中木：75000／本<br>低木：50000／本<br>生垣：40000／m<br>芝生：10000／㎡ | 中木：2本<br>低木：2本<br>生垣：10m<br>芝生：20㎡ | ¥850,000 |
| | | 住宅(内部倉庫利用) | 100000／㎡ | 30 ㎡ | ¥3,000,000 |
| | | | | | **¥10,440,000** |

予算表２－３

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価（円） | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| ③　片側が公共施設・倉庫などの街路<br>⑧大小の道が交差した路地 | 街路 | 砂利＋ランマー、アスファルト仕上げ<br>車道上に文字表記 | 50000／㎡ | 34 ㎡<br>2m×17m | ¥1,700,000 |
| | 倉庫 | 倉庫内『変な人など体験広場』教室<br>教室仕様 | 150000／㎡ | 54 ㎡<br>6m×9m | ¥8,100,000 |
| | | 可動間仕切り | 100000／m | 6m | ¥600,000 |
| | 倉庫南側･フェンス | スチールフェンス | 50000／m | 7.5m | ¥375,000 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 倉庫西側・植栽 | 人工植栽 | 生垣：40000／m | 生垣：10m | ¥400,000 |
| | 空き家<br><br>（倉庫西側道路挟んで） | 木フェンス<br>門扉（ポストなど含む） | 50000／m<br>50000／箇所 | 12m<br>6m+3m+3m<br>１箇所 | ¥650,000 |
| | | フェンス内の植栽（人工植栽） | 中木：75000／本<br>低木：50000／本<br>土：25000／㎡ | 中木：1本<br>低木：4本<br>地面：18㎡ | ¥725,000 |
| | | 空き家<br>外周部エイジング加工 | 150000／㎡ | 13.25㎡<br>5.5m×<br>2.5m | ¥2,062,500 |
| | 街灯 | コンクリート電柱・電灯・看板付き<br>（脚部特殊加工）<br>照明制御装置あり | 300000／本<br>800000／セット | 2本<br>1セット | ¥1,400,000 |
| | | | | | **¥16,012,500** |

予算表２－４

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価（円） | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| ④　管理者のいない<br>駐車場・空き地 | 駐車場 | 砂利＋ランマー、アスファルト仕上げ<br>車道上に文字表記 | 50000／㎡ | 15㎡<br>1.5m<br>×10m | ¥750,000 |
| | フェンス | スチールフェンス | 50000／m | 10m | ¥500,000 |
| | 自動販売機 | ジュース自販機<br>（中古機・利用不可機） | 150000／台 | 2台 | ¥300,000 |
| | 北側外壁 | 壁 | 200000／m（壁長） | 10m | ¥2,000,000 |
| | | 駐車場外観フェイク仕上げ<br>（写真張り付けもしくはペイント） | 30000／㎡ | 70㎡<br>10m×<br>7m | ¥2,100,000 |
| | | | | | **¥5,650,000** |

予算表２－５

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価（円） | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| ⑤　連続した家並みの間にスポット的に存在する空き地・空き家 | 街路 | 砂利＋ランマー、アスファルト仕上げ<br>車道上に文字表記 | 50000／㎡ | 22.5 ㎡<br>2.5m×9m | ¥1,125,000 |
| | 住宅③（北西の奥行き 1m の住宅） | スチールフェンス | 50000／m | 4m | ¥200,000 |
| | | フェンス内の植栽 | 低木：50000／本<br>生垣：40000／m<br>芝生：10000／㎡ | 低木：1本<br>生垣：4m<br>芝生：5㎡ | ¥260,000 |
| | | 住宅 | 100000／㎡ | 3 ㎡<br>1m×3m | ¥300,000 |
| | 住宅④（南西の奥行き 1m の住宅） | 木フェンス<br>門扉（ポストなど含む） | 40000／m<br>50000／箇所 | 6m<br>１箇所 | ¥290,000 |
| | | フェンス内の植栽<br>（人工植栽） | 中木：75000／本<br>低木：50000／本<br>芝生：10000／㎡ | 中木：1本<br>低木：2本<br>芝生：8㎡ | ¥255,000 |
| | | 住宅（内部倉庫利用） | 800000／㎡ | 4.5 ㎡<br>1m×4.5m | ¥450,000 |
| | 空き地 | スチールフェンス | 50000／m | 4m | ¥200,000 |
| | | フェンス内の植栽 | 低木：50000／本<br>芝生：10000／㎡ | 低木：2本<br>芝生:18㎡ | ¥280,000 |
| | | その他<br>（ドラム缶やコンクリ管） | 200000／セット | 1 セット | ¥200,000 |
| | | | | | ¥3,560,000 |

予算表２－６

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価（円） | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| ⑥　かって方向を向いている家並み<br><br>⑦　両側に高い塀がつづく細い路地 | 街路 | 砂利＋ランマー、アスファルト仕上げ<br>車道上に文字表記 | 50000／㎡ | 30 ㎡<br>2.5m×12m | ¥1,500,000 |
| | 住宅⑤（北西） | 木フェンス<br>門扉（ポストなど含む） | 50000／m<br>50000／箇所 | 10m<br>１箇所 | ¥550,000 |
| | | フェンス内の植栽（人工植栽） | 中木：75000／本<br>低木：50000／本<br>芝生：10000／㎡ | 中木：1本<br>低木：1本<br>芝生：7㎡ | ¥195,000 |
| | | 住宅（内部倉庫利用） | 100000／㎡ | 12 ㎡<br>2m×6m | ¥1,200,000 |
| | 住宅⑥（西南） | ブロック塀 | 70000／m | 8m | ¥560,000 |
| | | ブロック塀内の植栽（人工植栽） | 中木：75000／本<br>低木：50000／本<br>芝生：10000／㎡ | 中木：1本<br>低木：1本<br>芝生：12㎡ | ¥245,000 |
| | | 住宅（内部倉庫利用） | 100000／㎡ | 10 ㎡<br>2m×5m | ¥1,000,000 |
| | 住宅⑦（東南） | ブロック塀 | 70000／m | 8m | ¥560,000 |
| | | フェンス内の植栽（人工植栽） | 中木：75000／本<br>低木：50000／本<br>芝生：10000／㎡ | 中木：1本<br>低木：1本<br>芝生：17㎡ | ¥295,000 |
| | | 住宅（内部倉庫利用） | 100000／㎡ | 8 ㎡<br>2m×4m | ¥800,000 |
| | 街灯 | コンクリート電柱・看板付き（脚部特殊加工） | 300000／本 | 2 本 | ¥600,000 |
| | | | | | ¥7,505,000 |

予算表２－７

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価(円) | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| ⑨　ゴミ落書きが多い薄暗い路地<br><br>⑩　団地内のエレベータ・外階段<br><br>⑪マンションのピロティーなどの駐車場 | 街路 | 砂利＋ランマー、アスファルト仕上げ<br>車道上に文字表記 | 50000／㎡ | 30 ㎡<br>3m×10m | ¥1,500,000 |
| | 団地１階 | 駐車場（コンクリ仕上げ（鉄筋配金））<br>ライトバン（スライドドア、スモークガラス、中古車）<br>自動車（中古車） | 50000／㎡<br>150000／台 | 36 ㎡<br>6m×6m<br>2 台 | ¥1,800,000 |
| | | エントランスホール<br>（エントランスドア・ポストほか） | 200000／㎡ | 24 ㎡<br>6m×4m | ¥4,800,000 |
| | | 団地用 EV（旧式に似せる） | 5000000／台 | 1 台 | ¥5,000,000 |
| | | 団地外階段 | 250000／㎡ | 9 ㎡<br>1.5m×6m | ¥2,250,000 |
| | 団地２階 | 団地内２階『S1 教室』<br>教室仕様 | 150000／㎡ | 60 ㎡<br>10m×6m | ¥9,000,000 |
| | | | | | ¥24,350,000 |

予算表 ２－８

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価（円） | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| ⑫　見通しの悪い公園・トイレ<br>⑬　強い光の街灯が一本だけの公園 | 整地及び植栽 | 芝生仕上げ（砂利＋ランマー）<br>土仕上げ（砂利＋ランマー） | 50000／㎡ | 120 ㎡<br>12m×10m | ¥6,000,000 |
| | | 公園内植栽（人工植栽） | 中木：75000／本<br>低木：50000／本<br>芝生：10000／㎡ | 中木：6 本<br>低木：8 本<br>芝生：120 ㎡ | ¥2,050,000 |
| | 公園フェンス | 公園用スチールフェンス・ポール | 40000／m | 22m（12m+10m） | ¥880,000 |
| | トイレ | トイレ（内部はデフォルメ仕様<br>・外壁はタイル仕上げ） | 150000／㎡ | 13.5 ㎡<br>4.5m×3m | ¥2,025,000 |
| | 公園用屋外灯 | 屋外電灯（脚部特殊加工） | 500000／本 | 2 本 | ¥1,000,000 |
| | 公園用遊具 | 置き型遊具 | 400000／箇所 | 1 箇所 | ¥400,000 |
| | 公園ベンチ | 置き型ベンチ | 200000／箇所 | 1 箇所 | ¥200,000 |
| | 北側外壁 | 壁 | 200000／m（壁長） | 15m | ¥3,000,000 |
| | | 外観フェイク仕上げ（写真張り付けもしくはペイント） | 30000／㎡ | 105 ㎡<br>15m×7m | ¥3,150,000 |
| | | | | | ¥18,705,000 |

S2（①～⑬）、S3 総額 ¥103,872,500

予算表２－９

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価（円） | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| こんな時、どうする？体験フロア<br><br>（20m ダッシュ） | 体験フロア壁面 | 間仕切り | 150000／m<br>（高さ 7m 仕様） | 78m<br>30m×2、9m×2 | ¥11,700,000 |
| | グランド整備 | 外観フェイク仕上げ（写真張り付けもしくはペイント） | 30000／㎡ | 546 ㎡<br>78m×7m | ¥16,380,000 |
| | | ゴムチップ仕上げ（砂利＋ランマー） | 80000／㎡ | 270 ㎡<br>30m×9m | ¥21,600,000 |
| | | 文字表記 | 120000／一式 | 一式 | ¥120,000 |
| | ダッシュ人形 | 人形が学童を追いかける<br>（サイドレール・駆動部分・人形・制御装置） | レール：50000／m<br>ﾓｰﾀ部分：700000／箇所<br>人形：300000／人<br>制御機器：1200000／箇所 | ﾚｰﾙ：30m<br>ﾓｰﾀ：1 箇所<br>人形：2 人（予備 1 体含む）<br>制御 1 箇所 | ¥4,000,000 |
| | 逃げ込み用住宅（4 棟） | フェンス<br>門扉（ポストなど含む） | 60000／m<br>50000／箇所 | 30m<br>4 箇所 | ¥2,000,000 |
| | | フェンス内の植栽 | 低木：50000／本<br>生垣：40000／m<br>芝生：10000／㎡ | 低木：4 本<br>生垣：10 m<br>芝生：30 ㎡ | ¥900,000 |
| | | 住宅 | 500000／箇所 | 4 箇所 | ¥2,000,000 |
| （大声出し体験） | 大声計測 | 集音計で各地点の大声を計測する | 7500000／一式 | 一式 | ¥7,500,000 |
| | | | | | ¥66,200,000 |

S4 総額

¥66,200,000

予算表２－ 2

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価（円） | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | サイン計画 | ゾーン説明支柱サイン<br>（説明印字付き） | 750000／箇所 | 16 箇所 | ¥12,000,000 |
| | 施設外周部仕上げ | 外周部フェイク仕上げ<br>（写真張り付けもしくはペイント） | 10000／㎡ | 1120 ㎡<br>160m×7m | ¥11,200,000 |
| | 施設照明計画 | 昼光・夕暮れ・夜間モードを再現 | 25000000／一式 | 一式 | ¥25,000,000 |
| | 施設雨天装置 | 降雨装置<br>配管・スプリンクラー改造 | 50000／㎡ | 1000<br>50m×20m | ¥50,000,000 |
| | 施設空調設備 | 全館空調 | S1：個別空調（400000）<br>S2：全館空調（12000000）<br>S3：全館空調（7000000） | 一式 | ¥19,400,000 |
| | S1 教室 | 教室２室 | 150000／㎡ | 40 ㎡×2 室<br>8m×5m、2 室 | ¥12,000,000 |
| | エントランス部 | ガラス間仕切り・ガラス自動ドア | 200000／m<br>（自動ドア駆動部分含む） | 10m | ¥2,000,000 |
| | 消防設備 | スプリンクラーほか | 30000／㎡ | 1250 ㎡<br>25m×50m | ¥37,500,000 |
| | 施設天井仕上げ | 吊パネル・フェイク仕上げ<br>（写真張り付けもしくはペイント） | 30000／㎡ | 1000<br>50m×20m | ¥30,000,000 |
| | | | | | ¥199,100,000 |

S1、設備
その他総額
¥199,100,000

子ども棟
合計
¥369,172,500

予算表 ２－3

| テーマ | 内容 | 仕様 | 単価（円） | 数量 | 費用 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大人棟 | 学童見守り用カメラ | デイナイトネットワークカメラ | 136500／箇所 | 20 箇所 | ¥2,730,000 |
| | | ジョイスティック | 50000／個 | 1 個 | ¥50,000 |
| | 映像機器一式 | 映像プレゼンシステム（PC4 台含む） | 30000000／一式 | 一式 | ¥30,000,000 |
| | | プロジェクター | 500000／台 | 6 台 | ¥3,000,000 |
| | | 電動式大型スクリーン | 840000／台 | 4 台 | ¥3,360,000 |
| | | 固定スクリーン | 100000／台 | 2 台 | ¥200,000 |
| | 取り付け工事 | 映像機器・PC 接続工事一式 | 7300000／一式 | 一式 | ¥7,300,000 |
| | 教室設備 | ホワイトボード | 83000／台 | 1 台 | ¥83,000 |
| | | テーブル・イス | 400000／台 | 10 台 | ¥4,000,000 |
| | 保護者教室 | 教室仕様（既存室の改修のため） | 100000／㎡ | 48 ㎡ 8m×6m | ¥4,800,000 |
| | | 中二階（キャットウォーク）設置 | 鉄骨階段：750000／箇所 鉄骨ｷｬｯﾄｳｫｰｸ（滑り止め加工）：100000／㎡ | 階段：2 箇所 ｷｬｯﾄｳｫｰｸ：30 ㎡ 2m×15m | ¥4,500,000 |
| | | | | | ¥60,023,000 |
| | | | | | 保護者棟合計 |
| | | | | | ¥60,023,000 |
| | | | | | 子ども棟＋保護者棟合計 |
| | | | | | ¥429,195,500 |

予算表 ２－4

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| **設計・管理費用** | 設計・管理費用 | 建物詳細図・設備設計図・現場管理 | 上記総額の 7% | 429195500 円 ×7% | **¥30, 043, 685** |

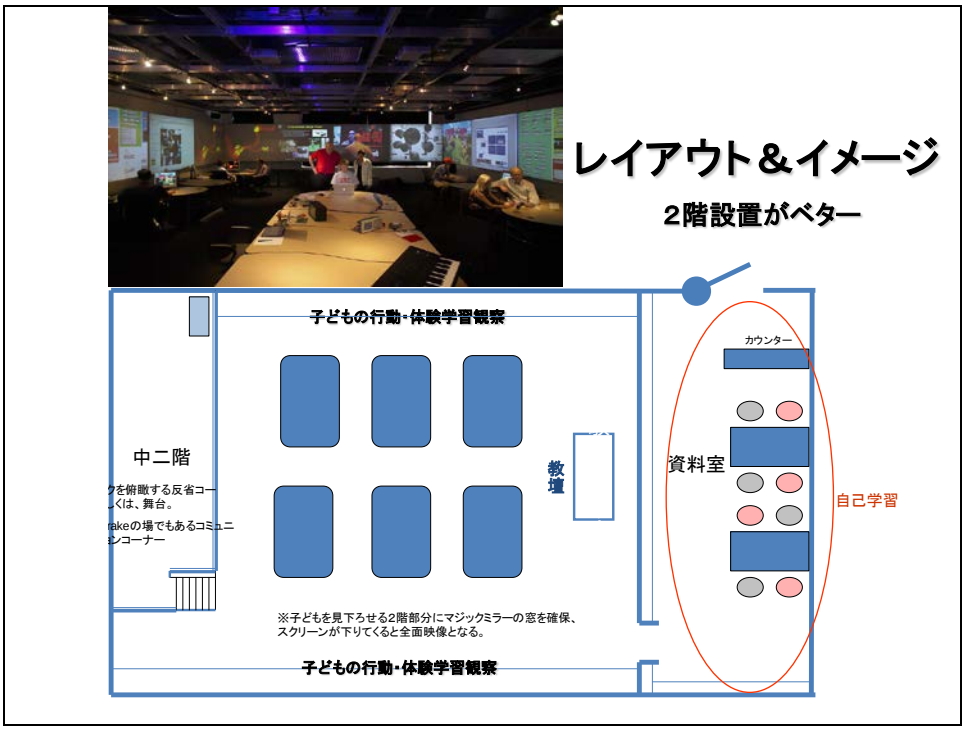
**建物総額**

**¥459, 239, 185**

予算表　２－13　　子どもの安全教育体験施設映像メデイア制作費

| テーマ | 内容 | 単価（円） | 数量 |
|---|---|---|---|
| 1 | 海外における体験施設紹介 | １７，１５８，０００ | ５本 |
| 2 | 幼・小・中学校向け親子で考える防犯アニメ | ３１，８１２，０００ | １２本 |
| 3 | 一般向け防犯ビデオ | １２，５５３，０００ | ６本 |
| 4 | メデイア制作／BD 制作 | ２，１００，０００ | １式 |
| 5 | 制作管理費等 | １００，２９０，３００ | |
| 6 | 消費税 | ５，０１５，５１５ | |
| | 総合計 | １０５，３０４，８１５ | |

保護者棟 1


レイアウト＆イメージ
2階設置がベター
子どもの行動・体験学習観察
中二階
を俯瞰する反省コー
くは、舞台。
akeの場でもあるコミュニ
ンコーナー
教壇
※子どもを見下ろせる2階部分にマジックミラーの窓を確保、
スクリーンが下りてくると全面映像となる。
子どもの行動・体験学習観察
カウンター
資料室
自己学習

≪施設でなされるモデル的教育カリキュラムの研究開発≫

（第３グループ　リーダ　宮田　美恵子　日本女子大学市民安全学研究センター研究員）

本研究においては、子どもの犯罪からの安全体験教育の基本カリキュラムを作成すると同時に、保護者や地域社会の人々についても同様な基本カリキュラムを作成する。同時に、子どものための試験的教材（ビデオ教材）の開発を行う。

## １．本研究の狙い：

危機に際し、子ども自身が何をどのように察知し、判断、決定、実行すればよいかを体得させるために、知識と共に実際の場面に応じた対応力＝安全基礎体力（後述）の形成を目指している。

さらに、子ども自身が自らを守ると共に、周りの大人（保護者・地域の人、学校の先生）は子どもをどのように見守り、かつサポートすべきかについて、それぞれのカリキュラムに基づき取得し、実際に生かされることを目的とする。

最終的には、体験教育施設における子どもの安全確保を目的とした
「総合的安全教育プログラム・パッケージ」
（Integrated Package of Experiential Learning Program for Safer Children ＝IPEL 以下、「IPEL」）の開発を目指すものである。

## ２．子どもの安全教育カリキュラム作成の基本的考え

### （１）危機

危機とは、簡単に言えば、個人や集団の均衡＝バランスが内外の力で破壊される、あるいはその可能性のあることである。それまで何もなかった状態から突然あるいは徐々に均衡が壊れ破壊されてゆくのを危機という。

たとえば、多くの場合、危機は外の力がもたらす。しかし、時として、自分や集団の中の力が作用して危機をもたらす場合もある。危機を防ぐというのは難しく、自分の中に潜んでいる気づかない危険要素とも向かい合わなければならない。

また、危機を防ぐというのは自分や集団のその時々の状態によって、危ない時があるしそうでない時もある。大人では何でもないことが、子どもにとっては大変な危機だというのを、しばしば、目にする。危機を事前に回避するというのは極めて難しいことと認識しなければならない。

（2）子どもと安全教育

安全教育は何よりも実学である。いま役に立たなくとも「いつかその時」身をもって体現されるものでなくてはならない。

危機はほぼ無差別に被害者に襲いかかる。しかし、実際の被害に遭った人々を見ると、体力のないあるいは社会的に守られていない人たちがほとんどである。一見危機は無差別に対象を選んでいるように見えても、実は弱者を選んでいます。危機の残酷さはそこにある。

特に子どもは弱者の代表である。

子どもは、まず、体力的に劣る。走る、飛ぶ、踏ん張る、叫ぶ。どの体力をとっても子どもは大人ほどの力を持たない。視る、聴くなども危機についての情報を十分に身につけていない子どもたちには思っているほどの力にはなり得ない。

それ以上に、子どもは大人ほどの知恵や知識を発揮できない。危機を危険として知る。危機をどうやって避けるのか、どの時点でどのような意志決定を図ればよいのか。子どもはどの問題をとっても十分な答えを持ちあわせていない。

子どもは弱者である。抵抗能力の低い弱者であり、なによりも危機に対する知恵も知識もこれからだという弱者である。情報弱者といってもよいかも知れない。この力のない弱者を「教育」によって、犯罪被害の遭遇から前もって回避させ、また不幸にして遭遇した際には安全無事に危機を克服する能力を体得させるのが「子どもの安全教育」である。

（3）安全教育カリキュラムを構築する際の必須要件

子どもの安全教育には２通りの流れがある。第１に、問題な状況に合わせ、その場その時その人がもたらす問題をともかく克服しようという「問題解決優先型教育」である。

第２は、問題な状況に必ずしも即有効ではないが、安全確保への基礎的な力を付けようという「体系的基礎力優先型教育」である。

いずれの教育にしろ、次の条件を踏まえることが必須である。

ア）子どもの発達段階

イ）危機の様相

ウ）保護者・近隣・学校・地域社会の様相

エ）子どもの育つ社会―歴史的状況

危機の様相は、子どもの発達段階によって、当然、異なる。また、同様に危機は、保護者や近隣等の周辺環境、子どもの育つ社会や社会の歴史によっても異なってくる。

こうした条件を踏まえた子どもの安全教育カリキュラム作りがなされねばならない。

## ４．ＩＰＥＬにおける子どもの安全教育カリキュラム作成の基本的考え

### （１）ＩＰＥＬの基本構成

体験教育施設での「総合的安全教育プログラム・パッケージ」の全体構成は、図３－１の様である。

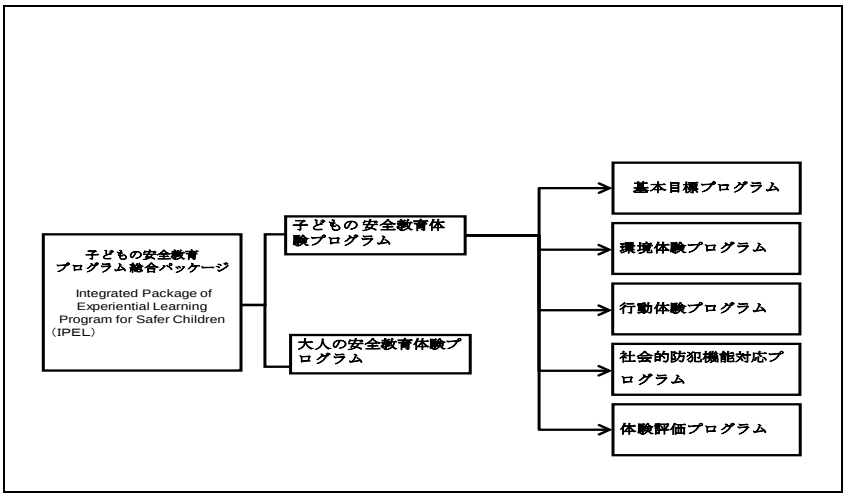



図３－１　　ＩＰＥＬの基本構成

### （２）ＩＰＥＬで教育する対象児童・生徒

教育の対象となる児童・生徒は、図３－２の様である。

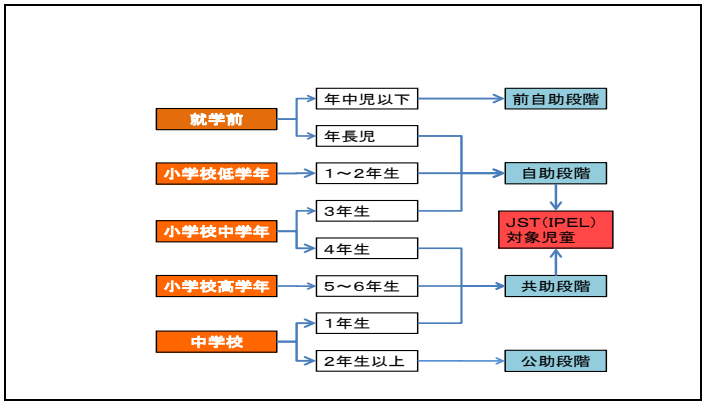


図３－２　ＩＰＥＬ対象児童・生徒

### （３）子どもの安全教育カリキュラムの全体像

子どもの安全教育は誕生したその時から始まる(参照、清永等「子どもの安全教育カリキュラム」２００７)。

その最終目的は、「子どもを大人にすること」にある。その段階として、図３－２に示された「前自助段階→自助段階→共助段階→公助段階」の４段階を設定する。この段階ごとに「大人となって安全に生きる力」、即ち、「安全基礎体力」を体得して行くための教育を受ける。安全基礎体力とは、図３－３示される「力」である。

ここで示された「体力」とは、走る・叫ぶ等の安全に関わる身体能力である。

「危機への知恵・知識」とは、被害をもたらす犯罪とはどういった現象か、その危機を回避するにはどういった手段があるのか等の知恵や知識を表す。

「コミュニケーション力」とは、保護者等との話・伝え・聞く力をいう。

「大人力」とは、図３－４で示された力をいう。

こうした安全基礎体力の形成を子どもの発達段階に沿ってカリキュラム化(第１案)したのが表３－１である。現在、この子どもの安全教育カリキュラムはVersionⅢまで改良されている。

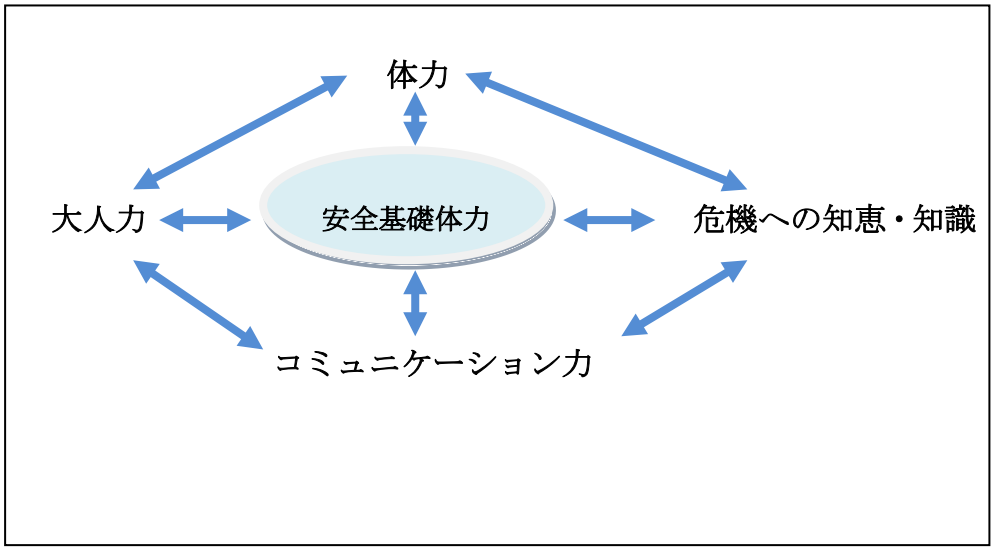



図３－３　　安全基礎体力の厚生

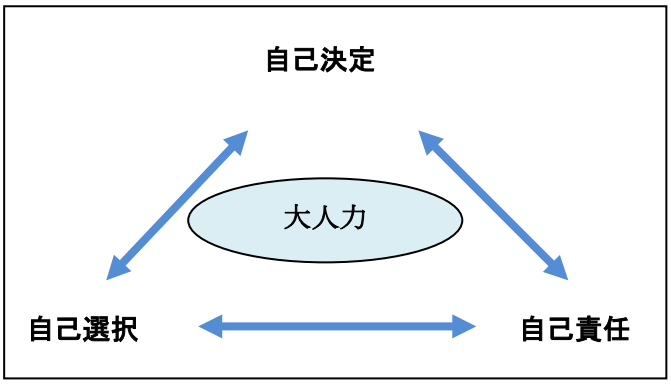



図３－５　　大人力の構成

表３－１　　子どもの安全教育カリキュラム全体表

| 年齢 | | 目標 | 内　　容（身につけておくこと。できること） |
|---|---|---|---|
| 1<br>3<br>5 | 前自助段階<br>自助段階 | 人の言うことを聞き、その指示に従える | ・心の通い合う大切で大好きな人がいる<br>・近所の人や知っている人にきちんと自分からあいさつができる<br>・ふざけずきちんと前を見て歩ける<br>・とっさの時に他人の言うことでも従い行動することができる<br>・とっさの時におうちの人の名前や電話番号が言える<br>・その日のでき事を先生やおうちの人にお話しできる<br>・みんなで決めたお約束を守ることができる。<br>・嫌なことは「いや！」と言え、身振り手振りで表せる |
| 7<br>9 | | 周囲の助力もあるが、自分の力で自分の安全を確かなものにできる | ・思い切って大きな声が出せ、一生懸命走って逃げれる<br>・自分の逃げ通せる距離感や体力等が身についている<br>・自分で自分の決まりを作り、それを実行できる<br>・何が変なことか危ないことかを自分で判断できる<br>・それを先生や近所の人や保護者、お巡りさんたちに的確に伝えることができる |
| 13<br>15 | 共助段階<br>公助段階 | 周りの安全安心のため積極的に行動できる | ・変なこと危ないことを自分で除くだけの体力や知恵を持っている<br>・周囲の人の安全安心のため率先して何かができる<br>・危ないことが起こった後、その被害に遭った・遭いそうになった人のために何かができる |

（４）ＩＰＥＬにおける教育カリキュラムの基本的枠組み

ＩＰＥＬにおいて子どもは、表３－１に示された発達段階ごとのカリキュラム項目全てについて学習するが、その学習は座学と体験からなされる。

座学は、教科書と視聴覚教材（ビデオ）によってなされる。例えば、表３－２の様なビデオ教材が試験的に開発された。

表３－２　　子どもの安全教育のためのビデオシナリオ（一部）

子どもの安全教育・アニメーション
３本・各１本８分前後

テーマ（１）ついて行かない　（２）大声を出す　（３）走る

## テーマ１：ついて行かない

問題シーン①：お母さんが事故に遭ったと言って、Ｂ男が車に乗ってＡ子を迎えに来た。その車に乗るべきか。
状況　　：子どもＡ子は下校途中。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
このシーンは、主に小学校１～２年向け。

Ｂ男：今日は、可愛い子を車に乗せて、すきな所に行こうか。（車を運転しながら）お、向こうから女の子が一人で来たぞ。しめしめ。（車を急停車させる。車から降りる）

（Ａ子に）「お母さんが交通事故にあった。お母さんに頼まれて迎えに来た。すぐに病院に行こう。」

Ａ子：エー、本当？

Ｂ男：本当だよ。すぐに行かなくちゃ。お母さん、きみの名前を呼んでるよ。

Ａ子：それじゃー。（と、車に乗ろうとする）

ここで画面ストップ。

先生：みんな、Ａ子ちゃんは車に乗って良いかな？

子どもたち：（一斉に）だめー！

先生:そうだよね。それじゃーＡ子ちゃん、どうしたらいいだろう？

子どもたち：（沈黙）

先生：そうだね。困ったねー。Ａ子ちゃん、どうしたか次を見てみよう。

体験学習は、「モデル的体験学習施設」で開発された設備を利用しての体験及び同施設のゾーン３と４で行われるロールプレイングとシャドイング(参照、「英国実査報告」の項)で進められる。

（５）ＩＰＥＬにおける発達段階・年齢差に応じた高次体験学習

以上の学習には、発達段階の異なる、例えば身体能力や到達学習水準に差のある年齢の異なる子どもたちが参加する。

ＩＰＥＬにおいては、体験教育基本プログラムとして図３－６のパッケージが用意される。

なお、基本プログラムの内、「環境体験プログラム」「行動体験プログラム」に関しては、既に作成されている。

この基本プログラムは年齢の低い発達段階初期の子どもたち全員、あるいは初めてこの体験施設を訪れた子どもたちが学習する。どの様な体験内容かは、先に「モデル的体験学習施設」の項で「平常時」から「危ない人との遭遇時」で述べた行動カリキュラムに示されている。

同時に、年齢の高い子どもたち、あるいは、既に２回目にリピータとして訪れた子どもたちは、図３－７に見るような、このプログラムを複数組み合わせた「より高次な内容のプログラム」で学習することとなる。どの様な「高次プログラム」で学習するかは、子どもの発達段階、前回の学習体得水準、体得内容等によって、メニュー化され引率教師との打ち合わせを経て決められる。

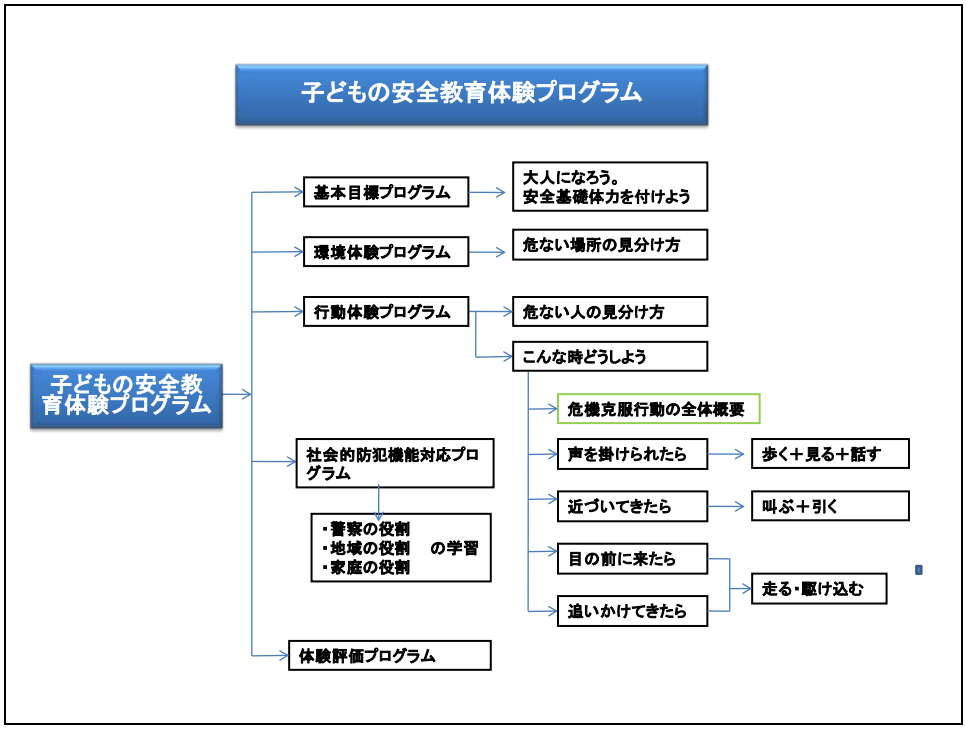
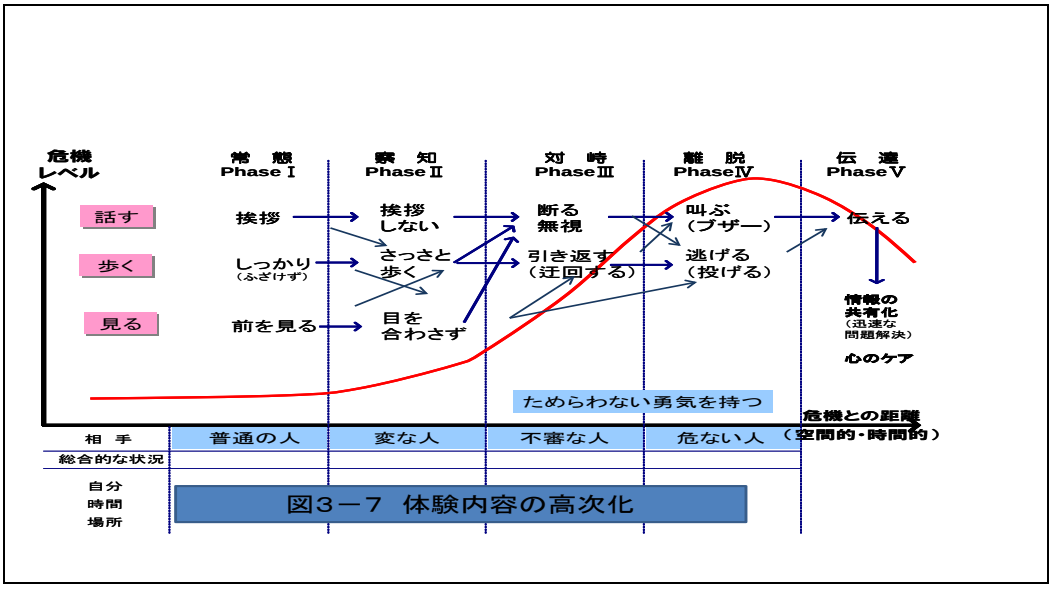


図３－６　　子どもの安全教育体験プログラム




（６）ＩＰＥＬにおける大人の体験教育カリキュラム作成の基本的考え

ＩＰＥＬには、本体験施設で学習する大人(保護者・近隣・教師)にも図３－８に見るようなプログラムが用意される。

既に、「行動体験プログラム」に関しては、既に作成されている(ＣＤ版)。

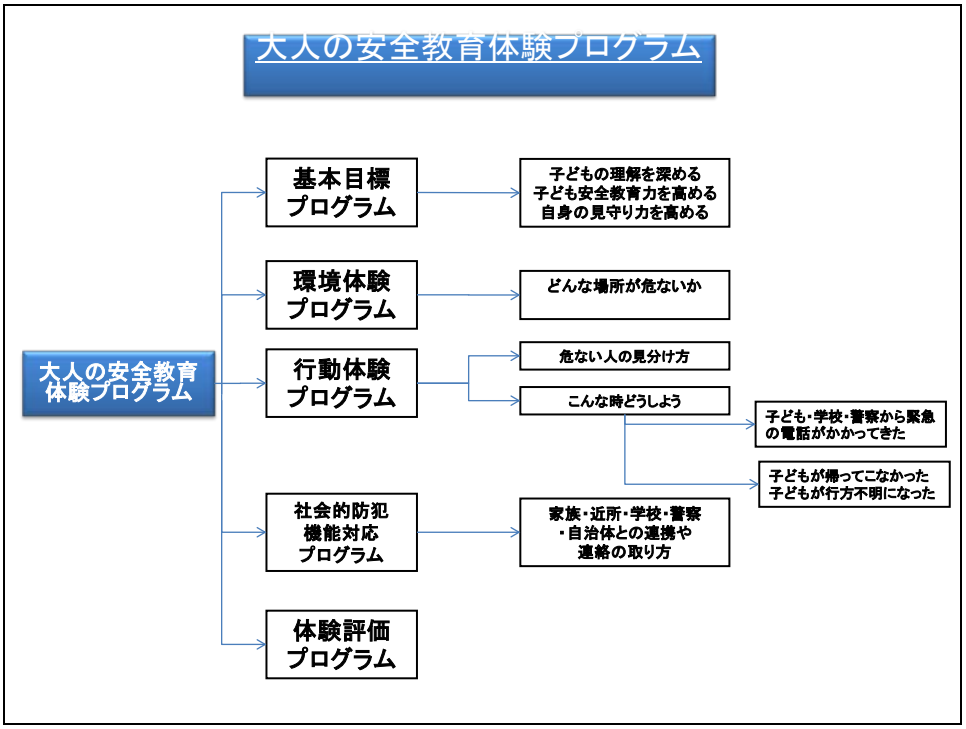


図３－８　　大人の安全教育体験プログラム

５．ビデオ教材の開発

本企画研究においては、以下のビデオ教材の開発がなされた。

① 子どもの安全体験教育施設制作過程
② 犯罪者の基本行動
- ・犯罪者に対する基本知識
- ・犯罪者の基本行動
- ・侵入盗犯の基本行動
- ・性犯罪者の特性

③ 犯罪者の危機回避プログラム
④ 「わたしの安全マップ」を作ろう
⑤ 計ってみよう、わたしの安全基礎体力

≪体験教育カリキュラムの評価手法とその指標に関する事前研究≫

（第４グループ　責任者　米川英樹　大阪教育大学教授）

## １．目的

将来的に体験型施設において子どもを対象とする設備と体験プログラムが実行された場合、実際に子どもの安全基礎体力形成にどのように関わるのか、その評価手法（どのように評価するのか）と評価指標（何を評価するのか）が検証されねばならない。

即ち、本作業では、体験型施設での教育効果をいかにして評価するかの方法と内容の事前検討がなされた。

## ２．方法

上記の目的を達成するため、具体的には、将来的に以下の2つの検討の必要性が挙げられる。

1. 安全基礎体力習得を目的に作成されたプログラムの妥当性に関する検証法の検討
2. 子どもの安全基礎体力養成のための施設設備が、どのように効果を与えるのかに関する評価法の検討

３．内容：

上記の２つの検討が、将来施設が設けられた際、どのようになされる必要があるかについて検討した。

４．プログラムの妥当性に関する検証法の検討

安全基礎体力習得の測定テストの妥当性について検討する。また、テストの各項目から、全体的な安全基礎体力がどの程度説明できるかを検討する。

**＜実験デザイン＞**

安全基礎体力形成プログラムを、対象である6歳から12歳の子どもに、各年齢毎に実施する。

**＜実験参加者＞**

対象者（子ども）それぞれの年齢段階で200名程度とする。

**＜手順＞**

プログラム対象年齢の子どもたちに評価テストを実施する。

＜データ＞

テストの各質問項目への正誤（1-0評価）。

＜分析方法＞

１つの従属変数（安全基礎体力得点）を複数の独立変数（テストの各項目）から予測・説明する、と仮定し重回帰分析を行う。

ｎ個の変数を説明変数とする重回帰式は以下のようになる。

$$\bar{y} = \beta_1 x_1 + \beta_2 x_2 + \cdots + \beta_n x_n + \alpha$$

この式は、ｙのｘに対する回帰を加算的な直線式で解釈するものである。ｘは説明変数、ｙは目的変数（被説明変数）、α、$\beta_n$は回帰係数と呼ばれ、$\beta_n$はそれぞれの説明変数にかかる重み（回帰係数）を表す。 ただし、説明変数間の関係（各独立変数が従属変数に及ぼす影響の向きと大きさ）は回帰係数ではわからない（回帰係数はそれぞれの変数がとる値の範囲や単位に依存している）ため、全ての変数を平均０、分散１になるように標準化した時の回帰係数「標準偏回帰係数＝β係数」を算出し、説明変数の寄与の大小を検討する。

算出された重回帰式の有意性は、回帰式で説明されるバラツキと、説明しきれないバラツキ（残差）との比（Ｆ値）で検定する。また、それぞれの（偏）回帰係数の有意性ついても同様に検定する。

５．施設設備の効果に関する評価法の検討

研究1によって、妥当性の証明と各項目間の重み付けが行われた安全基礎体力測定テストを用いて、施設が本当に安全基礎体力を向上させる効果があるのかを検討する。

＜実験デザイン＞

実験参加者を、体験施設を利用する群（実験条件群）と体験施設を利用しない群（統制群）の2つのグループにわける〔被験者間要因〕。実験条件群の参加者には、施設使用の前後で安全基礎体力測定テストを実施し、統制群の参加者には、実験条件群と同じインターバルをおいて、2回テストを実施する〔時間経過に伴う変化：被験者内要因〕。条件による安全基礎体力測定テスト得点の変化を検討する。

＜実験参加者＞

施設利用対象者（子ども）の各年齢層でそれぞれ200名以上。

＜データ＞

事前テスト得点：施設を利用する前の安全基礎体力。

事後テスト得点：施設を利用した後の安全基礎体力。

**＜手順＞**

大まかな流れ：事前テスト→体験施設の利用→事後テスト

体験施設を利用する前に、「事前テスト」を行う。体験施設における学習事項をあらかじめ参加者に明示し、自分の弱点を把握させることにより、学習に集中させようとする意味を持たせている。

このテスト結果は、体験学習の開始時までに全員にフィードバックされる。体験学習の終了時には、「事後テスト」を実施する。今回の体験学習が目指していた項目について、受講生が今回の見学でどの程度学習到達目標に近づいたかを振り返る機会を与える。学習成果を自分で把握することにより、次回の学習意欲を持続させるとともに、学習が不十分と思われる項目について復習を促す意図をこめている。

**＜分析方法＞**

「事前テスト」「事後テスト」における得点の変化を、2要因分散分析（被験者間要因と被験者内要因による混合計画）により分析する。

**＜具体的測定法＞施設体験評価テスト「はかってみよう、わたしの安全基礎体力」**

施設での設備やプログラムの体験学習によって、子どもの安全基礎体力がどの程度習得されたのか、体験事前・事後テストの比較によって子ども個々の習得状況を把握するものである。

- **評価の指標**

評価指標は「場所」「人」「対応策」を選定した。「場所」に関しては、子どもが犯罪被害に遭う確立の高い（子どもの犯罪遭遇体験率調査参照）場所を「危ない環境」として12のポイントを抽出し、その他に「変な人」「危ない子ども」と「対応策」の4つの項目から評価する。

**・施設とテストの対応関係と測定**

これらの3つの評価指標を施設に置き換えると、「環境体験ゾーン」「人間体験ゾーン」「対策ゾーン」に分けられ、施設のゾーニングと事前・事後評価テストはそれぞれが対応関係にある。このことから、施設体験の中に盛り込まれた危険な場所、人間、対策は、施設体験の事前・事後の子どもの習得レベルを比較することによって、どのように変化があるかの測定が可能となる。

・使用される検査表のサンプル

以下の検査表を用いて、子どもの回答の変化を計測する。ただし、ここで示されている検査表は、検査表の一部である。

**≪施設・教育運営組織体制に関する事前研究≫**

（第５グループ　責任者　篠原惇理　積水ハウス（株）設計本部次長）

施設される体験施設の組織・人員や予算の研究を行った。

１．体験施設の組織・人員や予算の研究

**（1）背景**

子どもが危ない。

あってはならないことですが、輝く未来のある子どもたちが、**住まいや公共の場での事故、犯罪などの暴力、地震等の災害**など、なにかしらの危機に毎日のようにあっている。

危機を防ぐことは本当に難しい。

危機は**外のチカラ**がもたらします、でも時として自分や集団の**中のチカラ**が作用して危機をもたらすことがある。大人ではなんともないことが、子どもにとっては大変な危機だというのはよく目や耳にすることである。

■**犯罪**には、子どもが身につける安全基礎体力として、体力、危機への知恵・知識力、コミュニケーション力などの自己形成とまわりの大人たちの見守りが必要である。

■**災害**には、「その時どうする」の体験的知恵や知識がなくてはならないものである。

■**事故**には、**ものづくり視点**と、犯罪にもある大人たちの見守りが必要である。

このように、個人や集団の均衡が内外のチカラで壊されようとする**危機**に対し、『安全安心』の暮らし実現のための**危機回避**をしっかり身体で覚えこむ必要があります。以下、犯罪を中心とした確かな安全教育カリキュラムと危険の状況体験を踏まえ安全基礎体力を養成するトレーニングのための施設モデルづくりと運営の方法企画をしていく。

**体験型安全教育プログラム、そして施設とは**

安全教育は実学である。危機は無差別に被害者に襲いかかる。しかし、実際の被害にあった人を見ると、体力のないあるいは社会的に守られていない人が大部分である。一見危機は無差別に対象を選んでいるように見えても実は弱者を選んでいる。危機の残酷さはそこにあるといえる。

しかるに、日本はもとより世界を見渡しても、犯罪に対する総合的な安全教育のカリキュラムは存在していないのが現状である。

本来、動物の世界においても、過去に遡る人間の社会においても生存のための安全教育は親の子に対する教育の原点であったはずであり、活動の範囲における危険への対応（危険への回避、対峙など）は経験の中で蓄積された独自のノウハウであったはずであ

る。
現在、私たち人間は、
①自然の一部として動物として生きる
②社会の一部として
③物理的環境の中で個人として
等の「３要素での存在」がそれぞれ分断され、外部化、複雑化することで、個人が持つべき「安全のための基礎的な能力」を持ち得ていない。大人は子どもへの安全教育のなんたるかの手法を持たない。まして弱者である子どもは、なにをかいわんやの状態である。
この総合的な体験型教育プログラムは、
モデル的教育カリキュラム
体験教育カリキュラム
モデル的体験施設
以上の３要素で構成され、タブーを破る犯罪の動向に対し、社会の安全基礎体力の構築を目指していくものである。

**（2）子どもの安全教育　組織の構成について**

安全体験施設の組織体制を考える前には、私たちのコミュニティの現状やおかれている課題を踏まえる必要があるそれが下記の二つの視点である。

視点１．安全教育は、子どもだけでなく家庭・地域・学校で

モンスターペアレントの存在や、地域のアノニマスな状況を踏まえると、子どもに対してだけでなく親や周りの大人を含めて自主的な安全コミュニティづくりの活動についての教育が不可欠である。

さらに、危機回避のための教育が必要ですが、どうしても教育というと小学校が思い浮かびますが、安全教育は子どもがこの世に生まれてきてから始まるべきである。そして、「はじめてのいってきます」つまり、通学という社会に出て行くまえの“はじめて”についての 安全教育は、未就学児童から必要になる。「お約束」の存在にまで言及すると、トータルな人間教育が必要で、学校だけに任せることは出来ないことがわかる。

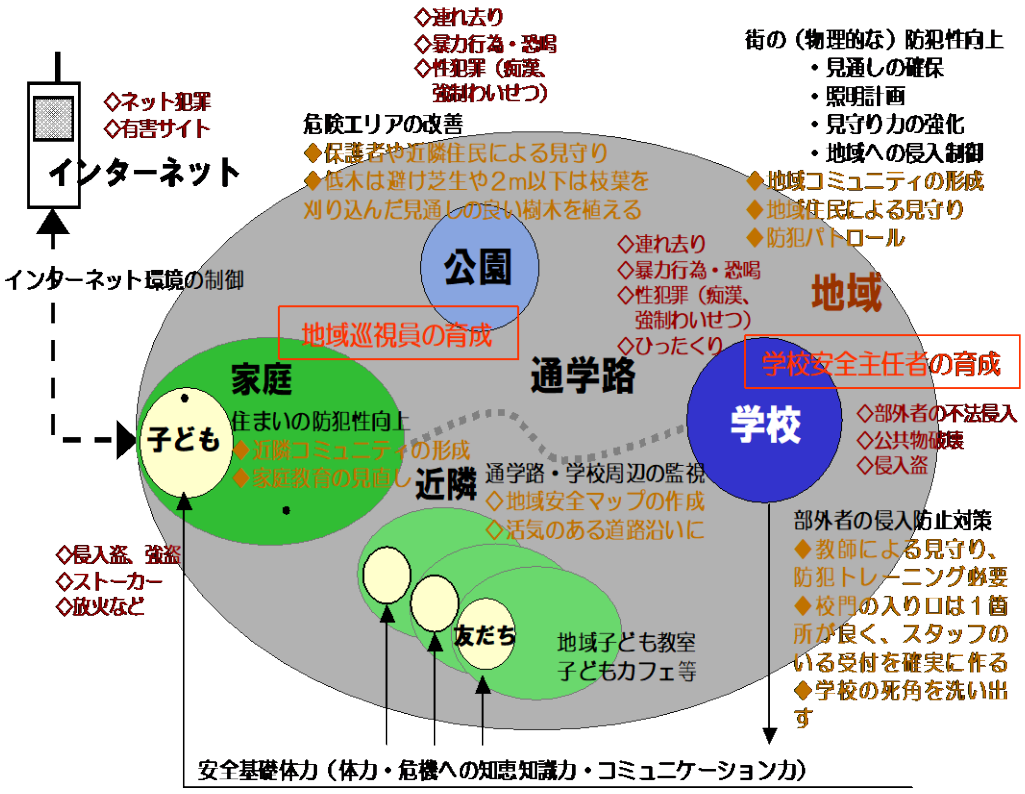
視点２．子どもの発達に沿った教育の視点が不可欠

子ども一人一人の発達（体力と心、知識）にふさわしい教育カリキュラムとする。ここでは、「運動能力」のレベルの把握が重要である。体の動きは、心を表す意味でも重要である。守られている幼児期から、通学という社会への第一歩である小学校入学を基本に、低学年をサポートできるようになる小学校高学年、社会の役割を担える中学生へと目標を示していく。

## （３）組織の構成

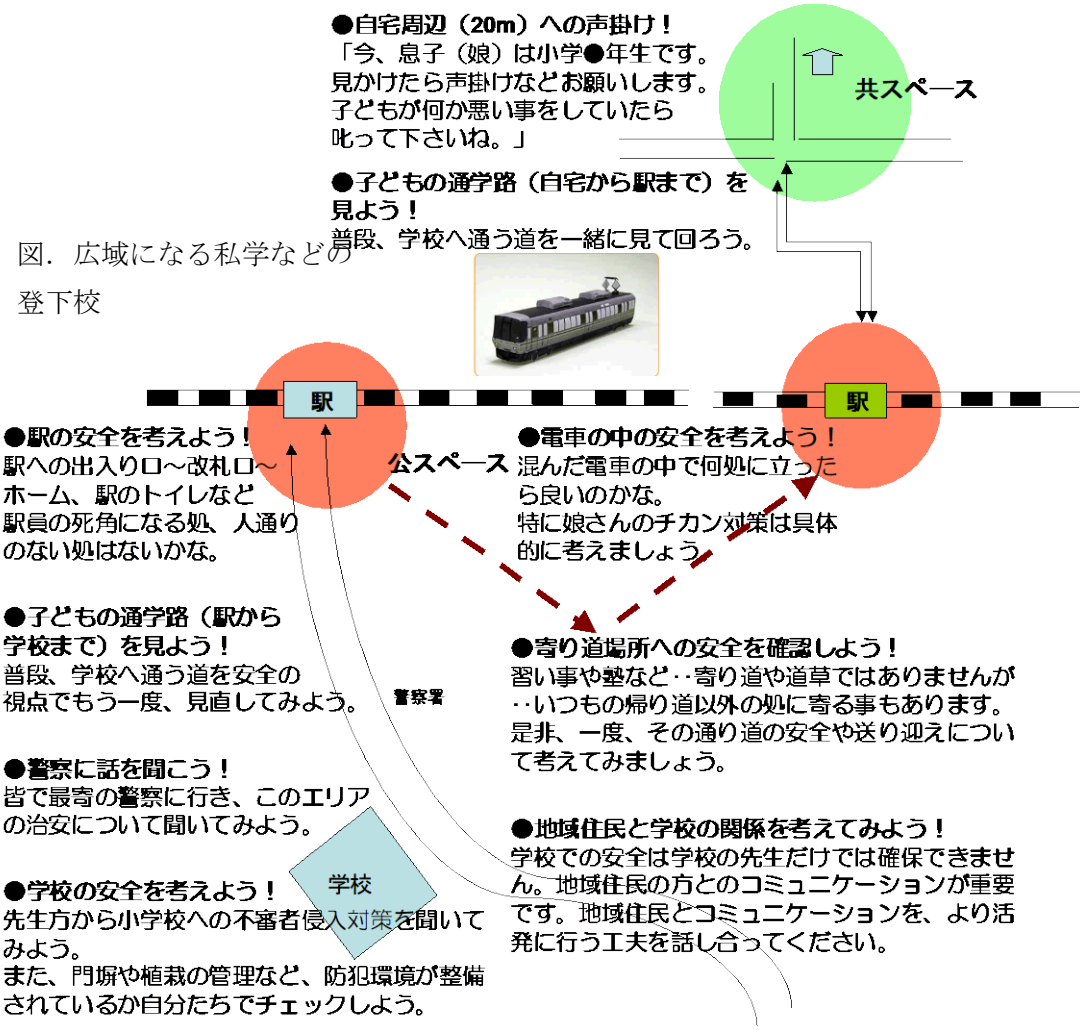
下図のように、子どもを取り巻く危機と地域を考えると、子どもを守る「担い手」の発想が大切となってくる。その担い手こそが、この安全体験施設の構成要素、つまり組織の基となる（図５－１）。

図。子どもを取り巻く危機と地域・対策




### エリアの拡大

上記のような、学区をベースにした地域社会から、池田小学校のように、広域な場所から生徒が集まってくる場合、当然学校地域の見守りも希薄になり、いろいろな交通機関の関与も増えることとなり、危険の形も変容する。そのチェックポイントを考えると下図のようになります。




図．広域になる私学などの登下校

| STEP1　チェックしながら | |
|---|---|
| | 周囲から見通しの悪いところ |
| | 人通りが少ないところ |
| | 落書きやゴミの不法投棄が多くて汚いイメージの場 |
| | 不法駐車や自転車が多いところ |
| | 電車の中での危険性 |
| | 繁華街やゲームセンターなど |
| | 交通事故の起こりそうな道路や場所 |
| | 暗い道路や公園、駐車場 |
| | 交番や子ども110番の家、コンビニの場所（助けてく |

| STEP2　安全MAPを作ろう | |
|---|---|
| ■ | 地図を作成し、危険写真を貼ってコメントを書き込もう！ |
| STEP3　安全MAPを囲んでみんなで話し合おう | |
| ■ | 登下校の道筋をもう一度こどもと話し合おう！ |
| ■ | 危険なエリアがあったなら、そのエリアを回避して通学できる道を発見しよ |
| ■ | ひとりで帰らせない工夫を考えよう！ |
| ■ | 先生や先輩の親しい相談しよう！ |

| 注意事項 | |
|---|---|
| ■ | |
| ■ | |
| ■ | |
| ■ | |
| ■ | 時間帯で人通りの傾向は変わる、子どもの登下校の時間に合わせて実行 |
| ■ | |

## ２．事業概要

（１）事業の主体

法人　　(NPO,財団など)

構成母体：・民間企業　・行政（地方自治体・教育委員会）　・市民（ボランティア)

・運営コアスタッフ　・研究所　　など

（２）維持費

体験施設の維持については、建物の借地、賃料は設置する自治体より提供を受ける。光熱費、施設メンテナンス、調査研究費、人件費（ボランティアの謝礼含む）、イベント費、コミュニケーション資料作成費などである。

施設メンテナンス費　　3000万円

イベント費　　1000万円

調査研究費　　1000万円

人件費　　3000万円

計　　約　8000万円

収入

・入場料　？？　　25%　　(教育委員会タイアップなど)

・防犯研究所事業　　50%

- 安全教材
- 研修費
- 請負事業　など
- e-Learnning

・スポンサー収入　　25%

・対象　■　子ども　３歳～１５歳

実際の教習（トータル２回目標）

５歳（小学校入学前）　　はじめてのいってらっしゃい

１０歳（小学校４年生レベル）

教習　　１部　１０時～１２時　／　２部　１３時～１５時

１０人／グループ　×　４組　　程度

■　大人

教習／講演など随時

## ３．施設概要

施設については、敷地と建物の無償提供が不可欠となる。

建物は、現在使われていない学校などの公共建築・工場　等の中で選定されるのがベストである。ただ、コンバージョンには、耐震補強等の問題もあり容易ではない。また、

体験施設の寸法、高さなど空間規模など要件にフィットすることが大切である。
施設は、体験の場のみでなく、研究の場でもありまずリアル体験と教育効果の検証を続ける。

## ４．安全体験施設のエリア展開

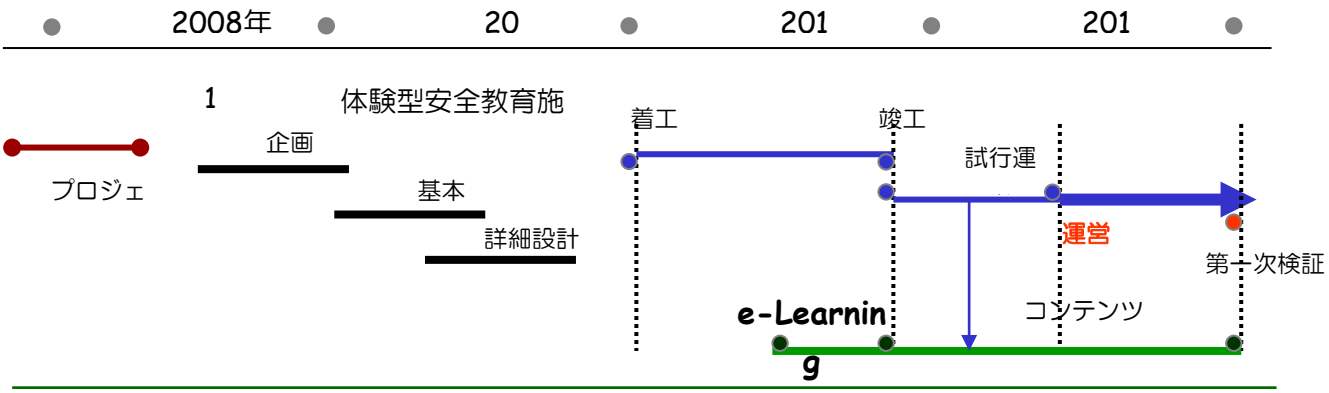
どこにも事例のないものにトライしていくことなので、積極的な自治体や影響力のあるエリア　等、成功に一番近い要素を持った所を選び運営しつつ、
改良を加えていく。当面は、右図赤い文字の都市で検討中。
将来は、順次エリアを、日本全国の８箇所ほどに展開していきたい。

## ５．e-Learning展開

体験施設の次の展開として、体験施設の
開発研究をベースに試行を繰り返し、
Net上で広くその主旨を広げる工夫をする。
つまり、バーチャルな空間に体験施設を
つくり広く安全教育の機会をつくる。

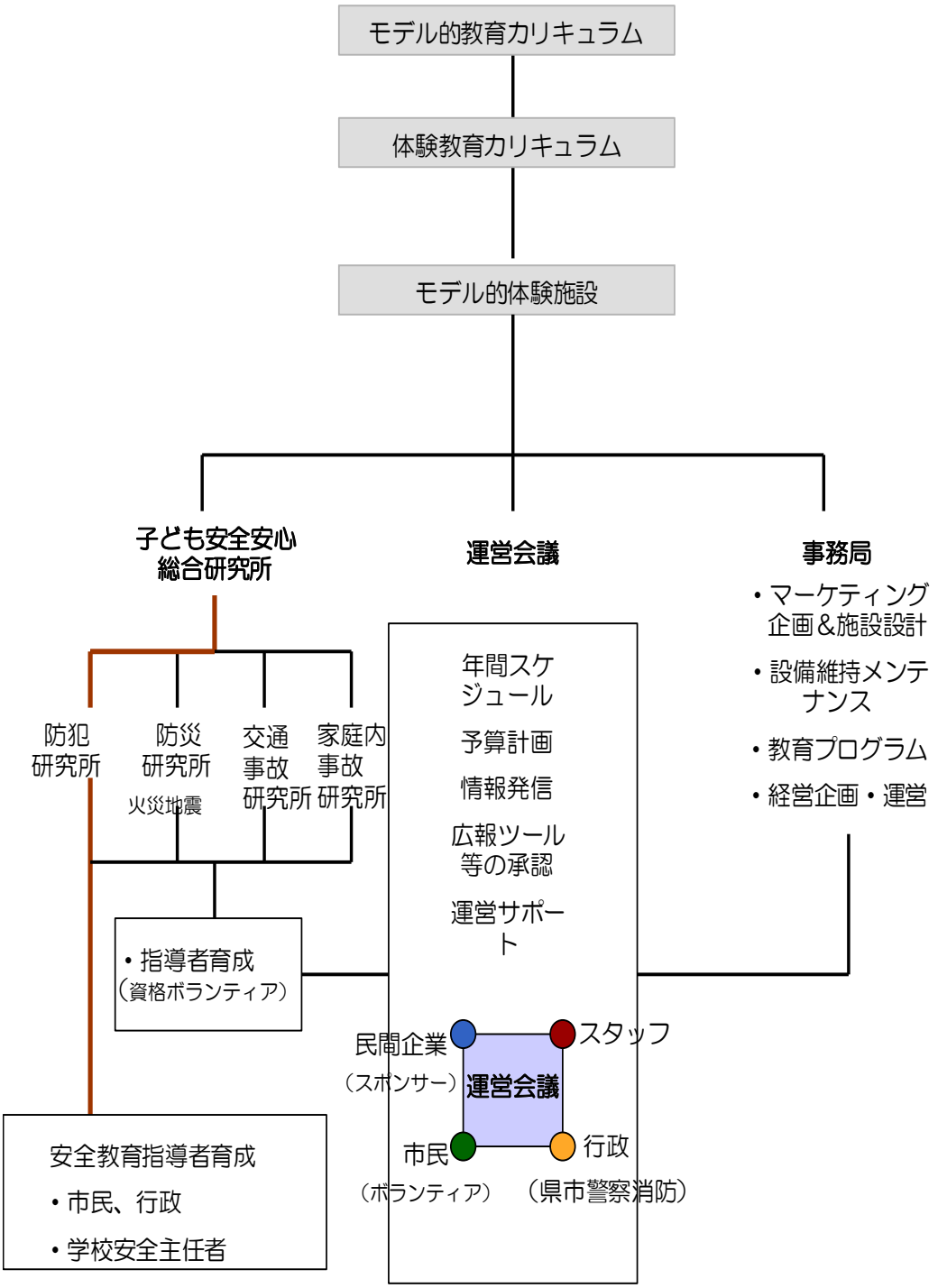
## ６．スケジュール案

**※赤は、検討中の自治体**



## ７．施設運営システム概要

### 施設運営システム概要



≪体験施設が設置される地域・場所の特性と特性に応じた施設の決定に関する事前研究≫

（第６グループ　責任者　小出治　東京大学工学部教授）

目的：

将来的に本体験施設が全国的に複数展開されるとした時、その地域特性に応じた展開が成されねばならない。

本研究では、社会経済指標により地域類を類型化し、類型に応じた体験施設の配置を検討する。

方法：

都道府県単位で、地域の特性を表す社会経済指標、地域の子どもの人口変動状況を表す子ども人口指標を採用し、この指標の数値を「林の数量化理論Ⅲ類」で処理し、地域類型を求めた。

また、地域の子どもを対象とする犯罪被害者数を求め、先の地域類型とクロスした。

採用指標：

各指標に付き２００２年及び２００５年の２年分が入力された。

① 社会経済指標として、１０歳刻み年齢人口、１～３次産業従事人口、小売業事業所数

② 子ども人口指標として、幼・小・中学校児童・生徒数

③ 子ども犯罪被害指標として、犯罪の被害に遭遇した幼・小・中学校児童・生徒数

結果:

主要な結果として、以下の点が上げられた。

① 都道府県類型として、以下の類型が抽出された。

・若手３次産業従事者主導児童増加型都道府県

・・・（典型例）東京・愛知・神奈川・埼玉

・高齢１次産業従事者主導児童減少型都道府県

・・・（典型例）岩手・北海道・高知

・若年人口動向停滞高齢人口急増型都道府県

・・・（典型例）大阪・三重・秋田・宮崎

・以下の地域類型と子ども犯罪被害との組み合わせが作成された。

表6-1　　（都道府県単位）地域類型

| | 子ども被害増加型都道府県 | 子ども被害横ばい・低減型都道府県 |
|---|---|---|
| 若手３次産業従事者主導児童増加型都道府県 | ①　東京・愛知・神奈川・埼玉 | ② |
| 高齢１次産業従事者主導児童減少型都道府県 | ③　北海道 | ④　高知・岩手 |
| 若年人口動向停滞高齢人口急増型都道府県 | ⑤　大阪 | ⑥　三重・秋田・宮崎 |

・上記の表から、子どもの犯罪被害を中心に、以下のようなタイプのあることがうかがえる。

都市型伸張・子ども犯罪被害問題地域・・・・①に属する地域

農村型進行・子ども犯罪被害問題地域・・・・③に属する地域

農村型進行・子ども犯罪被害過小地域・・・・④に属する地域

停滞型・子ども犯罪被害問題地域・・・・・・⑤に属する地域

停滞型・子ども犯罪被害問題過小地域・・・・⑥に属する地域

・以上の地域類型からいえることは、「子どもの安全教育体験施設」の設置も、東京に見るような社会経済的にも子どもの犯罪被害状況の中で設置される場合と、その他の場合とは異なった視点で造られて行かねばならない事である。

・東京の場合は「今ある現実状況への対応する施設」、三重のような地域においては「問題はないが、心の奥に潜む不安解消の施設」が求められる。

≪団体等参加調整検討≫

（第７グループ　責任者　古屋洋一　愛知県春日井市市民安全課長）

本グループでは、全国安全都市会議等において、地方自治体レベルでの参加方式についての検討を行った。

結果は、以下のようである。

・全国の自治体において、子どもの安全確保は重要かつ緊急な課題である。

・教育委員会でも取り組んでいるが、学校の中での対応に終始しているのが現状である。

・しかし、教育現場を中心として、子どもの「安全基礎体力」を形成する教育を体験施設等で行うことの要求には非常に強いものがある（参考、清永等「子どもへの犯罪からの安全に関する教育委員会調査」２００７）。

・今後の課題として、教育委員会・学校自治体の三者のスクラムによる取り組みが進めて行かねばならない。

・システムとしては、図のようなネットワークが構築されるのが望ましい。次年度以降、Eーラーニングシステムが殆んどの学校で構築されるので、それに乗せるとよいのではないか（図7-1）。

・将来的には、「学校―体験施設」共同の子どもの安全教育が進められるのが望まれる。必要であれば、予算や人材、子どもの参加を検討する。

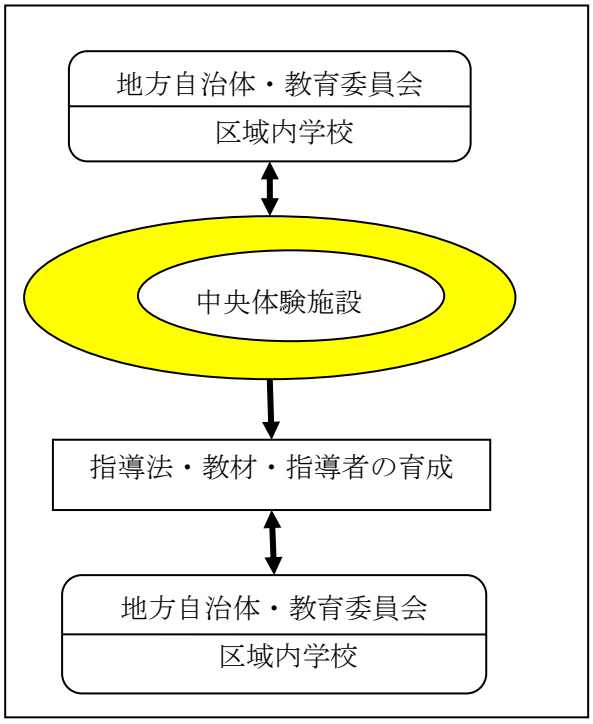


図7-1　　体験施設と地方教育委員会・学校の連携

（３）シンポジウムの開催

２００８年３月１日のシンポジウム「子どもの安全教育のこれまでこれから」(日本女子大学文部科学省GP研究主催)において、本企画研究で作成した模型等を展示発表した。

（４）海外調査活動

英国・子どもの安全教育体験施設

| 期間 | 調査先 | 目的 | 概要 |
|---|---|---|---|
| 2008年1月20日～1月25日 | Streetwise safety center（ボーンマス） | 英国における子どもの安全教育体験施設視察 | 英国における子どもの安全教育体験施設を視察し、日本における体験教育への示唆を得た。 |
| 2008年1月20日～1月25日 | Safety center（ミルトンキーンズ） | 英国における子どもの安全教育体験施設視察 | 同上（詳細は第一グループ報告書参照） |
| 2008年3月16日～3月19日 | Flashpoint Life-skills Center（ボドミン） | 英国における子どもと大人のための安全教育体験施設視察 | 子どもから大人までの安全体験教育施設を視察し、今後の日本での可能性に関して示唆を得た。 |